イラン立憲革命におけるラシュト蜂起

黒田　卓

【要約】一九〇九年二月にギーラーン地方の中心都市ラシュトに勃発した武装蜂起は、モハンマド・アリー・シャーのクーデタによって惹起された「小専制」期に終止符を打ち、立憲制を再確立する上での一大要因となった点で、イラン立憲革命史上高い評価を受けている。しかしながら、ラシュト蜂起について、従前の研究においては、立憲革命史の一部としての言及はあるにしても包括的な論究が未だになされていない状態にある。本稿では、タブリーズ蜂起においても共通してみられた、住民の自治組織的性格をもつアンジョマンならびに蜂起とそれに引き続く首都テヘランへの進軍の主力部隊となったモジャーヘディーンを手掛りにして、ラシュト蜂起、テヘラン進軍を中心に論述する。その際、最初に蜂起前後の「公的」なアンジョマンの比較を行ない、次に「社会民主主義」グループとしてのモジャーヘディーン及びザカフカズ地方からの支援部隊の検討を通じて蜂起の実態を把握し、最後にテヘラン進軍の有した意味を問うことによって、立憲革命史の一側面の考察を試みた。

史林　六七巻一号　一九八四年一月

はじめに

モハンマド・アリー・シャー Moḥammad ʿAlī Shāh のクーデタ（一九〇八年六月二三日）以降（「小専制」期 estebdād-e saghīr）、イラン立憲革命（一九〇五～一一年）の主要舞台は地方都市―とりわけ武装蜂起という形態を伴ったという点では、北部イランの二都市、タブリーズとラシュト―に移ることとなる。クーデタ後、長期武力抵抗を示したタブリーズ蜂起に呼応したラシュト蜂起は、バフティヤーリー部族軍のエスファハーン占領と共に、テヘラン攻略、シャーの廃位、第二次立憲制回復という一連のイラン政治史上の画期を成す諸事件の原動力となった。「今や地方が首都の動向を決定付ける」[1]

状況が現出したのである。

両都市の蜂起を包括的に考察する為には、都市住民の自治的組織としてのアンジョマン（anjoman）及び蜂起や進軍の主力部隊となったモジャーヘディーン（mojāhedīn）の分析が不可欠の課題となると考える。[2] アンジョマンは元来、ペルシア語で「集会・結社」の語義であるが、立憲革命期には独特の意味合いを有していた。ラムトンの見解[3]に拠って要約すれば、アンジョマンはカージャール朝下で、その起源を宗教的なあるいは文学的な集りにもち、革命の直前には秘密結社として専制の暴露、民衆の教化を通じ、西欧の産物である法の支配、議会の確立等を要求し、立憲制期にはその成果を防衛する拠点となった。いわば、イスラーム的伝統と西欧的近代政治体制の橋渡し的存在、「新旧をつなぐ環」であった。

アンジョマンは、特に立憲制の確立以降、急速に増大するが、その性格は千差万別であった。その分類として、一般に、「公的」なもの（一九〇七年一〇月の憲法補則第九〇～九三条によって法的に承認）と「非公的」なもの（同法第二一条）に大別される。イヴァノフは「公的」な地方アンジョマンを次のように論ずる。アンジョマンの指導性はブルジョワジー・地主・聖職者の掌中にあったものの、イランのような封建制が残存し、半植民地状態にある国家において、アンジョマンは進歩的性格を有した。特にタブリーズ、ラシュトをそれぞれ中心都市とするアゼルバイジャン、ギーラーンのアンジョマンは事実上の最高権力を行使し、革命の深化の過程で、その階級構成はいくらか民主化の方向に転じた、と。[4] 以上の所論については、大筋、首肯できるが、ギーラーンに関しては十分な体系的論証が提出されているとはいえない。立憲革命が地方権力をどこまで奪取したかが重要な問題[5]となるなら、地方により性格を異にするアンジョマンの活動・変遷を史料上から再構成することも立憲革命研究の重要な作業の一環をなすと言えよう。この作業をアゼルバイジャンと並び称されるギーラーンの地方アンジョマンに試みようとするのが本稿の目的の第一である。

次に問題とするのがモジャーヘディーン（聖戦 jehād の戦士 mojāhed の複数形）である。タブリーズ蜂起と同様、ラシュト蜂起、テヘラン進軍参加者も総てモジャーヘディーンと呼ばれたが、モジャーヘディーンは狭義にはイラン人「社

会民主主義者」グループを指す。イランにおける「社会民主主義者」の存在や活動は主にソ連邦の研究者によって注目され、解明されてきたが、イランの「社会民主主義者」組織はイラン社会民主党（hezb-e ejtemāiyūn-e ʿāmiyūn-e Īrān）であり、「モジャーヘド」組織＝イラン社会民主党であるといった諸点を中心に研究がすすめられてきた。その背景には、ザカフカズ地方とアゼルバイジャン、ギーラーン等の北部イランとの結びつき（主としてイランからの季節的出稼ぎ労働者）を通じて、イランの「社会民主主義者」がロシア社会民主労働党やムスリム社会民主党「ヒンメト」の影響や指導性の下に活動していたかの如く主張する傾向がある。[6] 確かに、ザカフカズからの人的物的支援やその思想的影響があったことは否定し得ない事実だが、その影響力を余りにも単純化しすぎることにはやや躊躇せざるを得ない。ソ連邦の研究者マルティロソフも指摘するように、[7] 実際には社会民主主義の名の下に、様々な傾向のグループが存在しており、それらの政治的性格の解明が今後の研究上、必要となっているからである。従って、本稿の第二の課題は、ギーラーンにおける「社会民主主義」グループの動向を断片的な史料から跡付けると同時に、彼らに人的物的支援を与えたザカフカズからの義勇兵部隊の検討を通じて、ラシュト蜂起の実像を可能な限り明らかにすることである。

そして、第三に、従来の立憲革命史叙述では戦闘の詳細な記述にのみ紙数が割かれてきたテヘラン進軍を、事態の進展に即しつつ、政治動向との関連、進軍部隊の内実等の視点より問い直すことによって、進軍の有していた意味を再考しておきたい。

以上、本稿の取り扱うべき課題を略述した。ギーラーン地方の立憲運動史（ラシュト蜂起も含めて）に関する専著はイラン本国でも極めて僅少である。[8] しかしながら、我国では、既にタブリーズ蜂起について加賀谷氏が先鞭をつけられ、八尾師氏が更に詳細な実証・分析を加えた論稿を発表されている。[9] 本稿は以上の成果を踏まえつつ、ラシュト蜂起を中心に立憲革命の一断面をみようとする試みである。尚、主な史料・文献の略称は以下の通り。

TMI: Aḥmad Kasravī. *Tārīḫ-e Maṣḥrūṭe-ye Īrān*. 13th ed. Tehrān, 2536 Shāhanshāhī.

THSA: Aḥmad Kasravī. *Tārīkh-e Hijdah Sāle-ye Ādharbā'ijān.* 7th ed. Tehrān, 2536 Sh.

TBI: Nāẓem ol-Eslām Kermānī. *Tārīkh-e Bīdārī-ye Īrāniyān*, ed. S. Sīrjānī. 5 parts in 2vols. Tehrān, S. H. 1357.

TEMI: Mahdī Malekzāde. *Tārīkh-e Enqelāb-e Mashrūṭiyyat-e Īrān.* Tehrān, jeld-e 5 (n. d.), jeld-e 6 (S. H. 1332).

MM: *Modhākerāt-e Majles dar doure-ye avval-e taqnīne-ye Majles-e Shūrā-ye Mellī.* Tehrān, n. d.

MG: H. L. Rabino. *Mashrūṭe-ye Gīlān, az Yād-dāsht-hā-ye Rābīnou*, ed. M. Roushan. Rasht, S. H. 1352.

GJM: Ebrāhīm Fakhrā'ī. *Gīlān dar Jonbesh-e Mashrūṭiyyat.* 3rd ed. Tehrān, 2536 Sh.

NG: 'Atā' ollāh Tadayyon. *Naqsh-e Gīlān dar Nahẓat-e Mashrūṭiyyat-e Īrān*, part of *Tārīkh-e Gīlān.* Tehrān, S. H. 1353.

AT: Yeprem Khān. *Az Anzalī tā Tehrān, Yād-dāsht-hā-ye Khoṣūṣī-ye Mojāhed-e Armanī*, ed. Ḥ. Ṣadīq, trans. Narūs. Tehrān, 2536 Sh.

YSA: 'Abd oṣ-Ṣamad Khel'atbarī, ed. *Yād-dāsht-hā-ye Sepahsālār-e A'ẓam Moḥammad Valī Khān Khel'atbarī.* Tehrān, S. H. 1328.

YT: 'Alī Dīv Sālār. *Yād-dāsht-hā-ye Tārīkhī-ye rāje' be Fatḥ-e Tehrān va Ordū-ye Barq.* n. p., n. d.

OTM: Īraj Afshār, ed. *Ourāq-e Tāze-yāb-e Mashrūṭiyyat-e marbūṭ be Sāl-hā-ye 1325–1330 Qamarī.* Tehrān, S. H. 1359.

YKhS: Esmā'īl Rā'īn. *Yeprem Khān Sardār.* 2nd ed. Tehrān, 2535 Sh.

FDE: Ferīdūn Ādamiyyat. *Fekr-e Demoukrāsī-ye Ejtemā'ī dar Nahẓat-e Mashrūṭiyyat-e Īrān.* Tehrān, 2535 Sh.

PR: E. G. Browne. *The Persian Revolution 1905–1909.* Cambridge, 1910. repr. 1966.

"PCP": H. L. Rabino. "Les Provinces Caspiennes de la Perse, le Guilân," *Revue du Monde Musulman*, t. 32, Paris, 1916–7.

FO. 248: U. K. Foreign Office, Public Record Office. *Correspondences to and from Resht*, 724 (1900), 940 (1908), 970 (1909).

尚、"PCP" のペルシア語訳：H. L. Rabino. *Velāyāt-e Dār ol-Marz-e Īrān, Gīlān*, trans. J. Khomāmīzāde. Tehrān, S. H. 1350 も随時参照した。

① E. Abrahamian, *Iran between Two Revolutions*, Princeton, 1982, p. 97.

② 立憲革命研究は欧米学界において、国際関係やウラマー・商人・部族等の社会諸階層の革命参加等、多角的な視点より数多くの研究蓄積がみられる。ただ、立憲革命全体の特徴・性格を対象とする専論は知見の及ぶ限り極めて僅少である。Cf. E. Abrahamian, "The Crowd

in the Persian Revolution 1," *Iranian Studies*, II, 4 (1969), pp. 128-158; "The Causes of the Constitutional Revolution of Iran," *International Journal of Middle East Studies*, X (1979), pp. 381-414; N. R. Keddie, "Popular Participation in the Persian Revolution of 1905-1911," in *Iran: Religion, Politics & Society*, London, 1980, pp. 66-79. 尚、本稿はこれらの成果を念頭におきつつ、ラシュト蜂起、テヘラン進軍という具体的歴史事象より立憲革命の一端を照射せんとする試論であり、他方面の個別研究との比較検討が必要であることは言を待たない。

③ A. K. S. Lambton, "Djam'iyya-(iii) Persia," *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed; "Secret Societies and the Persian Revolution of 1905-1906," *St. Antony's Papers*, 4 (1958), pp. 43-60; "Persian Political Societies 1906-11," *St. Antony's Papers*, 16 (1963), pp. 41-89.

④ *М. С. Иванов, Иранская революция 1905-1911 годов*, Москва, 1957, стр. 146-148. (以下 Иванов と略記)

⑤ 加賀谷寛『イラン現代史』近藤出版社、一九七五、四六頁。

⑥ 詳しくは、八尾師誠「イラン立憲革命とロシアーソ連邦における研究史上の問題点—」『オリエント』二一—一、一九七八、一四四—一五七頁、参照。

⑦ *А. У. Мартиросов, Новые материалы о социал-демократическом движении в Иране в 1905-1911 годах, «Народы Азии и Африки»*, 1973, № 2, стр. 120. 尚、近年のソ連邦の著作では「モジャーヒド」組織は統一的な綱領を有しておらず、個々の組織が独自の綱領を採用していたとされ、その性格に関しては近代的党派の外面的属性を中世的宗派の特質に独自に結合させたものに過ぎないという幾分、否定的な評価が加えられている。См. С. Л. Агаев, *Иран в прошлом и настоящем (пути и формы революционного процесса)*, Москва, 1981, стр. 56-58.

⑧ Fakhrā'ī, *CJM* が殆ど唯一の専著である。但し、同書は研究書というよりも、ラシュトに生まれ、後に「ジャンギャリー」運動にも参加したファフラーイーの得た情報を盛り込んだ史料としての側面が強い。従って、全体として体系的な著述の体裁をとっていない。同書の評価については、Mansūre Ettehādiye, *Peydāyesh va Taḥavvol-e Ḥizb-e Siyāsī-ye Mashrūṭiyyat*, Tehrān, S. H. 1361, ṣ. 49-50 参照。

⑨ 加賀谷寛「イラン立憲革命の性格について」『東洋文化研究所紀要』二六、一九六二、七—一一頁、八尾師誠「イラン立憲革命におけるタブリーズ蜂起」『イスラム世界』一二、一九七七、六四—八六頁。ラシュト蜂起はタブリーズ蜂起とも共通する諸特徴をもっており、特に八尾師氏の論稿からは示唆を受ける所が多かった。

第一章　ギーラーン地方アンジョマン

「非公的」なアンジョマンもギーラーンには数多く存在したが、[1] 殊に「公的」なアンジョマン[2]は、(1)一九〇七年二月頃に結成されたラシュト・アンジョマン、(2)一九〇七年八—九月に選出された州アンジョマン、(3)ラシュト蜂起(一九〇九年

二月）後に結成された州アンジョマン、の三つの段階に画することが可能である。本章では、これらの「公的」なアンジョマンを考察の対象とし、アンジョマン結成の過程と活動及びその人的構成を検討する。

（一）アンジョマン結成の過程と活動

ラシュトにおける最初のアンジョマンは、ハッジー・モジュタヘド Ḥājji Mojtahed なる人物の家に設けられたアンジョマンを中心に結成されたと推定される。[3] 一九〇七年五月に、前ケルマーン知事でモジュタヘド mojtahed に棒打ち刑を科した為に悪評の高かったザファロッ・サルタネ Ẓafar os-Salṭane のギーラーン知事への任命、及びモハンマド・アリー・シャーと首相アミーノッ・ソルターン Amīn os-Solṭān の立憲制破壊を企図した言動の情報を受けると、ラシュトの大群衆がこれに抗議して、このラシュト・アンジョマンに集結し、市内のバーザールを閉鎖した。ギーラーンの主要都市、アンザリー、ランガルード、ラーヒージャーンのバーザールも閉鎖され、ラシュト、アンザリーから州アンジョマン法と国民銀行の設立を要求して国民議会（majles-e shūrā-ye melli）宛に電報が打たれた。[4] この行動にはラシュト近郊の農民（raʿāyā）も参集した。その様子を、ラシュト駐在イギリス副領事ラビノは「Fūman, Kasmā, Asālam の方面から大群衆が帷子（kafan）を着、鉄砲を持って、アンジョマンを援助する為にラシュトに入った。彼らの前には太鼓（tabl）とウラマーの一団がいた。[5]」と記し、ロシア領事も一九〇七年五月一二日に、「ラシュトとアンザリーでは周辺の農民が寄り集り続けた。彼らにデモ隊が応じた。そして赤旗を持ち、革命歌を歌って市へ帰ってきた。[6]」と報告した。この騒動は国民議会で州アンジョマン法が成立した（A.H. 一三二五年 Rabīʿ oth-Thānī 月／一九〇七年五／六月公布）という知らせが着いた為に、一応の収拾をみた。ラシュト・アンジョマンとそれを支援した群衆が要求した州アンジョマン法（qānūn-e anjoman-hā-ye eyālati o velāyati）を、ラムトンは「実施されなかった」とするが、[7] 少なくともギーラーンに関する限り、不備はあるにせよ、同法制定が引き金となって新しい州アンジョマンの成立をみたと言える。また、同法がテヘランから州アン

ジョマン選挙実施の援助の為に派遣されたモアーゼッドッ・サルタネ Moʿāẓed os-Saltane とモハンマド・サフィー・ハーン Moḥammad Ṣafi Khān によって大モスクで読み上げられたという事実[8]からも、国民議会が知事権力に対し、如何なる掣肘を設けようとしたかという点からも、その内容は十分検討に値しよう。以下、同法の重要だと考えられる部分を抄訳する。[9]

まず、州アンジョマンの任務について次の如く規定する。

八七条：州アンジョマンの任務は定められた法の遂行についての監視、下記の説明に基づく州に特有の諸事に関する調査・決定、または州の利益・重要事・繁栄への警告と忠告に限られる。

八八条：法の制定は州アンジョマンの任務外である。

八九条：州アンジョマンは地方知事についてのあらゆる申立てについて調査することができ、知事の行為が法に反しているときはいつでも、法の侵犯を警告しなければならない。もし十分な結果が得られないなら、詳細を政府の中央官庁に報告し、被抑圧者の権利の擁護を望むことができる。

この他に、州アンジョマンの任務として、不当判決の調査、税の徴収・送金の監視、公共事業への資金配分等が言及され、九七条では州アンジョマンの決定できる事項（道路・橋・病院・孤児院等の管理、恩給・奨学金の配分等）が列記される。そして、九八条では政府権力との関係について、「州アンジョマンは州の諸事情や必要事について精通している為に、政府当局は州内で変更を行なう前に、当該アンジョマンの意思を求めるが、その意思に服従する必要はない。」とし、一〇三条では、「あらゆる生活・行政問題について、自らの意思を表明することはできるが、政治問題について議論する権利を有しない。即ち、行政原則、国家の憲法、政府の政策に関する問題から成る刑罰や政治問題。」と規定する。

以上の条項から明らかなように、州アンジョマンには政治問題の討議権や立法権が付与されておらず、専ら州内の行政と知事権力への抑制機能を果たすべきものとされていたのである。国民議会が目論んだのは、諸州に完全な自治権を与え

ようとしたというよりも、むしろ知事権力の専横体制を押さえ、中央政府の支配の貫徹を一層合理化しようとするものであった。

さて、ギーラーンでは一九〇七年五月の騒動の後に、同年八月、州アンジョマン法に基づいて、初の州アンジョマン選挙が実施される運びとなった。しかし、この時幾つかの問題[10]が持ち上がり、結局、本来、選挙実施に責任を負う管理委員会（anjoman-e nozzār）[11]のメンバーに階層別に選ばれたラシュト代表六名と地区代表の一八名を含めて、二四名で構成する州アンジョマンが誕生することとなった[12]。

ところで、この時期のラシュト・アンジョマン、州アンジョマンの特徴を概括しておくならば、第一に知事権力と住民、また住民間の対立の仲介役を行なったことである。既に州アンジョマン選出以前のラシュト・アンジョマンは知事セパフダール Moḥammad Valī Khān Sepahdār-e Aʿẓam と対立し、バーザールの閉鎖を繰り返していた（一九〇七年二―三月）[13]し、新しく結成された州アンジョマンも真先に、「一週間の内に、四日、専制や抑圧について調査をする用意がある。」[14]と声明した。しかしながら、表1にみられる農民騒動に対して、この時期のアンジョマンは仲介的立場を取ろうとしたものの、表中のトゥーラムの例が示すように地主の利害を代弁していた[15]。因みに、これらの農民騒動が単なる即自的抵抗にとどまらず、理解の程度は別として立憲制確立に起因していたこと[16]、直接的な史料的裏付けは得られないがアブル・ファズリーなるアンジョマンに関係をもっていたこと等は、立憲革命が農民不在の革命と評されるだけに一層注目に値するのである。

第二の特徴としては、完全でないにしても、かなりの州行政に直接、携わったことである。例えば、ラシュト・アンジョマンは「総ての事に―Sefīd 川の管理や繭の売買にまでも―参画している」[18]と言われたし、後の州アンジョマンも地主の農民に対する付加税（rosūmāt-e dheyl）の廃止、農民の結婚許可料（javāz-e ʿarūsī）の軽減[19]、司法会議（majles-e ʿadliye）の設置、肉や他の食料品の価格統制等[20]を決定した。また、ギーラーンの他地方にアンジョマンを組織する為に、ラシュト

表1　農民騒動発生状況（1907〜1908）

発生時・場所	事件概要
1907年3月 Rasht	約500名の農民が地主の圧迫から逃がれて，ラシュトの Khāhar-Emām モスクに避難，「今後，我々は小作料（māl ol-ejāre）を支払わない」と宣言。①
1907年6月〜 Kargānrūd	族長（khān）'Amīd os-Salṭane とその長子 Arfe' os-Salṭane の専制支配に対し部族民が決起，族長一族の家を略奪・放火，一族を追放。以後，Arfe' os-Salṭane が1912年にロシアの援助で支配を復活する迄の約5年間，同地は無政府状態。②
1907年6月 Leshte-neshā	アンジョマンを作る為に派遣されていた Seyyed Jalāl Shahr Āshūb は自ら Jalāl od-Dīn Shāh と名乗り，農民に7年間，小作料と税を免除するとし，2，3千名の農民を組織。投獄されるも，農民は彼を解放する為にラシュトへ行くことを宣言。③
1907年6月 Tūlam	手代・役人（pīshkār va farrāsh）とアンジョマン代表が小作料支払いの勧告に派遣されるが，農民は棒で打って追い返し，数百名がラシュト・アンジョマンの建物の内外をうめつくし，圧力をかける。④
1907年7月 Fūman	同地の大地主 Ḥājjī Seyyed Raẓī は農民に耕作を強要するも，逆に農民に脅迫され生命の危険を感じ，テヘランへ逃亡。⑤
1907年7月 Shaft	同地の世襲の知事 'Alī Khān の手口について，農民はラシュトに押しかけ不平を申し立て，「人民の土地を彼は強奪した」と主張。⑥
1907年8月 Gaskar	2人のセイエドが人民を抑圧したとされ，事件調査に役人が送られるも，セイエドから，賄賂を受け取ったとして農民が彼らを追放。⑦
1907年9月 Deylamān	Mīrzā Moḥammad Ḥoseyn Qāẓī なる者が農民を集め，赤旗を立てて，同地の世襲の知事 Moshīr ol-Mamālek 邸に押しかけ，彼を追及。⑧
1908年2月 Kasmā	同地の副知事 Ṣadīq or-Ra'āyā は同地に来るなら殺されようと脅迫されるが，無視して出向いた為，途中で射殺さる。この事件には多くの農民が関係していると言われた。⑨

① *MG*, ṣ. 11　② *MG*, ṣ. 34；*GJM*, ṣ. 206–9；Иванов, с. 134. 尚，1908年秋に数度行なわれた知事 Sardār-e Afkham と 'Amīd os-Salṭane による同地への遠征と撤退については，*MG*, ṣ. 71–4；FO. 248/970, Nos. 148, 171–2 参照。③ *MG*, ṣ. 30–1　④ *MG*, ṣ. 32–3　⑤ *MG*, ṣ. 37；*GJM*, ṣ. 105　⑥ *MG*, ṣ. 36–7　⑦ *MG*, ṣ. 40　⑧ *MG*, ṣ. 52　⑨ FO. 248/940, Nos. 39–40；Иванов, с. 252

・アンジョマンはランガルード、レシュテ・ネシャー、ラーヒージャーンに代表団を派遣した。[21]

このような州アンジョマンに関して、ロシア側史料中では、「ラシュト・アンジョマンは地方の現在の事実上の支配者（правитель）」[22]（一九〇七年七月）とも、「知事（ザヒーロッ・ドウレ Ẓahīr od-Doule……筆者註）は強まりつつあるアンジョマンの影響力と闘うことができなかった」[23]（一九〇八年四—五月）とも評される。確かに、本節冒頭に示した騒動からも窺えるように、この時期のアンジョマンが立憲

制を支え、それを地方に実質化する拠点として、ザヒーロッ・ドウレ自身も「知事業務は停止させられてしまった」[24]と嘆息する如く、知事権力を凌駕する側面もあったことは見逃しえない。しかしながら、筆者のみた史料に散見する記事に拠る限り、州アンジョマン法の規定する範囲を大きく越えた力量を保持していたとするにはやや疑問が残る。何故なら、同じロシア側史料中にも、アンジョマンは、「その活動の主要目的をラシュト住民の利益を専制から擁護すること、都市整備、生活費軽減と看做した」[25]とも記されているからである。

いずれにせよ、州アンジョマンの活動はシャーのクーデタ後、前警察長官のサルダーレ・アフハム Sardār-e Afkham の知事着任（一九〇八年七月三〇日）により、他のイランの諸都市と同様、一時的後退を余儀なくされた。クーデタの情報が着いた当初は、州アンジョマンもバーザールを閉鎖し、抵抗を試みたが[26]、アンジョマン議長の逃亡、サルダーレ・アフハムによる立憲派活動家の迫害・追放、ラシュト、アンザリーのアンジョマンからの罰金取立て等が強行されるに及んで、最早「ギーラーンでは立憲制の名は語られない」[27]状況となった。

この状況を打破したのがラシュト蜂起である。蜂起直後にアンジョマンが結成され、モジャーヘディーンの秘密組織サッタール委員会（komīte-ye Sattār）と密接な関係を保った[28]。モジャーヘディーンの主力部隊がカズヴィーン進攻を開始して以降は、蜂起後作られた管理委員会（komisiyūn-e tartībāt）を基礎にして形成された州アンジョマンが一九一〇年三月に中央から知事が派遣されるまで、ギーラーンにおいて自治的支配を行なった[29]。各部門とその長官は次のようであった。

軍事委員会（komisiyūn-e jang）……後述
市政局（baladīye）……ハッジー・ミールザー・ハリール Ḥājjī Mīrzā Khalīl
警　察（neẓamīye）……サディーク・ハラム Ṣadīq Ḥaram
司　法（ʿadlīye）……マジドル・モルク Majd ol-Molk
郵便・電報（post o telegrāf）……バシーロル・モルク Bashīr ol-Molk

表2　アンジョマンの人的構成

		アンジョマン代表または構成員名
①		Ḥājjī Mīrza Moḥammad Reẓā (議長), Ḥājjī Akbar Arbāb, Ḥājjī Seyyed Maḥmūd, Sharī'atmadār, Mollā Moḥammad Reẓā-ye Chekūsarī
②		Ḥājjī Mo'in ol-Mamālek (議長), Mīrzā Asadollāh Khān, Ḥājjī Seyyed Maḥmūd, Sharī'atmadār, Moḥammad Reẓā-ye Chekūsarī, Ḥājjī Mīrzā Moḥammad Reẓā(以上, ラシュト代表), Ḥājjī Reẓā Āqā Fakhrā'ī, Ra'īs ot-Tojjār (以上, アンザリー代表) 他不明
③	a	Āqā Seyyed 'Abd ol-Vahhāb, Āqā Sheykh Ḥasan, Ḥājjī Moḥammad Eskandānī, Mīrzā Taqī Khān Mīrāb, Mashhadī Yaḥyā Tājer Rashtī
	b	Ḥājjī Mīrzā Moḥammad Reẓā, Ḥājjī Sheykh Ḥasanī, Seyyed 'Abd ol-Vahhāb Ṣāleḥ, Boyūk Khān Raḥmatābādī, Āqā Yaḥyā Ṭavvāf, Mīrzā Taqī Khān Ṭā'ife, Hārtūn Gālūstiyān, Mīrzā Javād Nāṣer ol-Molkī, Vakīl ot-Tojjār, Moḥammad Ja'far Eskandānī
	c	Ḥājjī Mīrzā Moḥammad Reẓā, Ḥājjī Sheykh Ḥasan, Āqā Seyyed 'Abd ol-Vahhāb, Vakīl ot-Tojjār, Mīrzā Asadollāh Khān, Ārtūn Masīḥī, Mashhadī Ḥājjī Āqā, Ḥājjī Moḥammad Āqā-ye Tabrīzī
	d	хаджи Мохаммед-Реза, Ага шейх Хасан, Ага Мохаммед Вакиль-эт-Туджар, хаджи Асадолла, хаджи Ага мирза Асадолла хан, Аветис, Арутюн

(典拠)　①-*MG*, ṣ. 9, ②-*MG*, ṣ. 45-6, ③-a-*MG*, ṣ. 82, ③-b-*GJM*, ṣ. 139, ③-c-*TBI*, j. 5, ṣ. 314, ③-d-Иванов, с. 353

を検討してきたが、第一次立憲制期のラシュト・アンジョマン、州アンジョマンと蜂起後の州アンジョマンとの基本的性格の相違—勿論、それは武装蜂起による知事権力の転覆によってもたらされたのだが—を要約すると、次のようになろう。即ち、前者が知事権力との拮抗関係の中で地方行政の補完的役割を果たしたのに対し、後者はほぼ完全な自治的組織として、テヘラン進軍部隊との連絡を保ち、シャーとその政府との交渉の任に当ったのであった。[30] このような性格の相違を人的構成の側面から次節で考察してみよう。

このうち、軍事委員会はサッタール委員会の直属であった事は言うまでもないが、その他の諸部門は、ほぼ州アンジョマンの影響下にあった。[31] 市政局は主に民生面を担当し、道路や路地の舗装、排水設備の建設、パン屋や肉屋の調査、市内の清掃等を行ない、警察は市内を四つの地域に分け、それぞれに長官 (kalāntar) を任命し、市内の治安の保持に努めた。司法当局は公権力の権利侵害の排除と法による権利擁護を謳った声明文を発行した。[32]

以上、「公的」なアンジョマンの推移

（二）アンジョマンの人的構成

前頁に掲げた表2中の①、②、③欄の人名リストは本章冒頭で述べ、前節で論述した三つの時期の「公的」アンジョマンの代表または構成員にそれぞれ相当する（以下、単に①、②、③と呼ぶ）。①、②についてはラビノの記述に拠るしか方法がないが、蜂起後の③にはラビノ（a欄）、ファフラーイー（b欄）、ケルマーニー（c欄）、イヴァノフ（d欄）の示す人名リストがある（以下、a、b、c、d）。c、dは蜂起直後に結成されたアンジョマンであると考えられ、aは既に第二次立憲制期に入った一九〇九年九月選出のアンジョマン、bは時期不詳である。また①、②、③—a、cは代表者名であり、bは構成員名、dはいずれか判じえない。

まず、この表の①、②を比較して、即座に気付くのは①の代表五人のうち、ハッジー・アクバル・アルバーブ Ḥājji Akbar Arbāb を除く四人までが②で選出をされていることであろう。この四人の中で、シャリーアトマダール Mīrzā Mahdī Sharī'atmadār とハッジー・セイエド・マフムード Ḥājji Seyyed Maḥmūd は立憲制擁護という立場からは程遠く、むしろ反立憲派ともいうべき人物であった。シャリーアトマダールは当時、ラシュトで最も影響力のあったモジュタヘドの一人であったが[33]、一九〇六年末の初の国民議会議員選挙の際には、その実施を妨害しようとし[34]、蜂起後には、殺害から免除される代りに三万六千トマーンを罰金としてモジャーヘディーンによって取り立てられた[35]。彼はこの罰金を地主や有力者から立憲派との闘いの為に集めていた十万トマーンの中から支払ったという[36]。ハッジー・セイエド・マフムードはシャリーアトマダールと並んで最有力であった反立憲派のモジュタヘド、ハッジー・ホマーミー Ḥājji Khomāmī の女婿であり、一九〇七年四月のウラマーを中心とする、ラシュト郊外のナーセリーエ Nāṣerīye における立憲制反対の抗議行動では、ホマーミー等と共に指導的立場にあった[37]。②の議長（ra'īs）であったモイーノル・ママーレク Mo'īn ol-Mamālek も元来、立憲制には同調していなかったが、一九〇六年末、バクーやティフリスで同地のモジャーヘディーンに

脅迫され、立憲派に転向する旨の誓紙を取られた。[38] しかしシャーのクーデタが成功するや否や、知事庁舎（dār ol-ḥokūme）に逃亡し、「今後、一切、立憲制には用はない。」と言明した。[39] 以上のことから、①、②の代表（特にラシュト代表）間には、共に階層別に選出されていたこともあって、殆ど差違がないこと、また代表間で立憲制について見解が必ずしも一致しておらず、反対乃至は動揺的な立場に立つ者も存在したこと等が知れよう。

それに対して、③について注目すべきなのは以下の諸点であろう。第一に、メンバーがほぼ一新していることである。僅かに①、②から一貫して残っているのはミールザー・モハンマド・レザー Mīrzā Moḥammad Reẓā のみであり、②からはミールザー・アサドッラー・ハーン Mīrzā Asadollāh Khān（c、d）だけである。第二には、比較的熱心な立憲派活動家が目立つことである。例えば、知事サルダーレ・アフハムによって共にマシュハドに追放されていた第一次国民議会のギーラーン選出代議士ヴァキーロッ・トッジャール Vakīl ot-Tojjār（b、c、d）とモジュタヘドのセイヨド・アブドル・ヴァッハーブ・サーレフ Seyyed ʻAbd ol-Vahhāb Ṣāleḥ（a、b、c）がアンジョマンに参加している。前者はロシア語を理解したので、ラシュトのモジャーヘディーンとバクーの革命家グループとの仲介役をしたと言われ、[40] 後者は先に触れたアブル・ファズリー・アンジョマンの創設者であった。[41] 更に、サッタール委員会の一員でもあったミールザー・ジャヴァード・ナーセロル・モルキー Mīrzā Javād Nāṣer ol-Molkī[42]（b）が参加していることに注目したい。何故なら、①、②のアンジョマンとモジャーヘディーンとの直接的な人的関係は管見の限り、史料上からは殆ど抽出しえないからである。[43] 第三には、Арутюн（b?、c、d）、Аветис（d）といったアルメニア人が参加していることである。この事実の背景には、当時ラシュトだけで、約百家族（うち四〇家族はイラン国籍）のアルメニア人が居住し、商業活動に重要な役割を果たしていたこと、[44] 蜂起、進軍に彼らが積極的に参加したこと、モジャーヘディーンの法の下での民族平等の主張[45] が反映した可能性のあること等が指摘できよう。

① Rabino, *MG*, s. 111-112 によるとギーラーンには以下のような「非公的」アンジョマンが存在した。（但し、「アンジョマン」とい

う語は省略し、名称・構成主体のみ掲げる）、(1)アブル・ファズリー Abū'l-Fazlī（一章註⑰参照）、(2)アスナーフ Aṣnāf（同職組合）、(3)マッラーキーン Mallākīn（地主）、(4)ヘイリーヤ Kheyriye（反動派と政庁職員 ajzā'-ye ḥokūmat）、(5)ファーテミーヤ Fāṭemiye（セイヤド sādāt）、(6)ルーハニーヤーン Rūḥaniyān（トッラーブ ṭolāb）、(7)ノスラト Noṣrat（タブリーズ商人）、(8)ヴァファー Vafā'（オスタードサラー Ostādsarā 区?）、(9)サファー Ṣafā'（サーガリーサーザーン Sāgharīsāzān 区）、(10)モアーヴェナト Mo'āvenat（チョマールサラー Chomārsarā 区）、(11)サッヤーリーヤ Sayyāriye（各アンジョマンからの一、二名の代表者によって構成）。大部分が立憲派であったとされる(6)のアンジョマン議長は「ジャンギャリー」運動の指導者クーチェク・ハーン Mīrzā Kūchek Khān であった（Tadayyon, *NG*, ṣ. 301）。(8)～(10)は居住区（maḥalle）住民によって結成されたアンジョマンであり、オスタードサラー区はラシュトの七居住区の一つ、サーガリーサーザーン区、チョマールサラー区はそれぞれ、ザーヘダーン Zāhedān 区、キャーブ Kiyāb 区の分区（nāḥiye）（Rabino, "PCP," pp. 86-87）。ロシア側史料（Иванов, стр. 146）では一九〇七年秋迄に一二のアンジョマンがラシュトに存在したとされるが、モジャーヘド、「公的」なアンジョマンを除く一〇アンジョマンのうち、名実共に一致するのは(4)、(5)、(6)だけであり、先に掲げたアンジョマン以外にも数多く存在した可能性も残されている。

② anjoman-e Rasht, anjoman-e melli, anjoman-e velāyati（または eyālati)-ye Gilān 等々、様々な呼称があるが、特記しない限り、州アンジョマン選出迄のアンジョマンをラシュト・アンジョマン、それ以降については単に州アンジョマンと称することにする。尚、一般にはヤーラト eyālat はヴェラーヤト velāyat の上位概念として想定できるが、本稿では区別なく「州」という訳語を当てる。

③ 一九〇七年二月の記事中に、「ハッジー・モジュタヘドの家に作られたラシュト・アンジョマン」とある（Rabino, *MG*, ṣ. 8）。

④ Rabino, *MG*, ṣ. 18-19. 同文中には州アンジョマン法ではなく選挙法（qānūn-e entekhābāt）と記されているが、国民議会宛の電報文要旨の中で州アンジョマン規則（neẓāmnāme-ye anjoman-hā-ye eyālati）が要求され（*MM*, ṣ. 332-333）、Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 69 でも同様に述べられているので州アンジョマン法とした。

⑤ Rabino, *MG*, ṣ. 19-20. この騒動に婦人や武装集団も参加していたことは興味深い。「店が閉められていた数日間、婦人でさえ棒を持って人々が店を開こうとするのを制止した。市の人々はここ数日間、鉄砲を携帯し、武装をし、赤旗を持ってバーザール内を行き来していた。」（Rabino, *MG*, ṣ. 21）。

⑥ Иванов, стр. 132-133.

⑦ A. K. S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia*, Oxford, 1953, repr. 1969, p. 179（岡崎正孝訳『ペルシアの地主と農民』岩波書店、一九七六、一八六頁）。マンスーレは A. H. 一三二五年 Ṣafar 月（三／四月）の法に基づいて州アンジョマンの基礎が確立したとしている（Ṣafar 月とするのは同法の議決時だと思われる）（Manṣūre, *Peydāyesh va Takavvol-e Ajzāb-e Siyāsī*, ṣ. 149-150）。また、キャスラヴィーは同法の Rabī' oth-Thānī 月成立時から各都市に存在した勝手なアンジョマンは消え失せ、同法に基づいてアンジョマンが選出されなければならなかったと述べる（Kasravī, *TM*, ṣ. 469）。尚、同法の評価については、Ст. Иванов, стр. 164-167.

⑧ Rabino, *MG*, ṣ. 38.

⑨ *MM*, ṣ. 278-280 からの抄訳。以下の引用も同所。

⑩ 第一に州アンジョマン法で規定された eyālat と velāyat の区別が不明確であって、ギーラーンが velāyat であるとされたこと（両者

の任務はほぼ同じであったが、中心都市選出代表数は eyālat 一二、velāyat 六)、第二に州アンジョマンの選挙を実施せずに階層別に選出することになったこと、第三に地区アンジョマン (anjoman-e bolūkāt) は解散するよう決定されたこと。これらの理由は定かでないが、テヘランから以下のような指示が届けられたという。

「もう選挙は実施せずに、六階層 (tabaqāt)、即ちウラマー・商人・農民・職人・地主・名士 (a'yān) によって選ばれ、各階層は自らの代表を指定するように。村々 (dehāt) に作られたアンジョマンは解散させられると決められた。」(Rabino, *MG*, ṣ. 43)。

⑪ *MM*, ṣ. 273-275 参照。州アンジョマン法第四七条によると管理委員会は選挙終了後一週間で解散することになっていた。

⑫ Rabino, *MG*, ṣ. 49. ラシュト近郊 (mavāzi) を除くとギーラーンは一八の地区に分けられていた (Rabino, "PCP," pp. 57-58) から、州アンジョマン法第一一九条にいう定数に合致しているが、代表者名はラシュト、アンザリー以外は判明しない (表2、②欄参照)。

⑬ Rabino, *MG*, ṣ. 9-10.

⑭ Rabino, *MG*, ṣ. 47. 新しく結成された州アンジョマンはアンジョマンの討議・決定等を掲載した *Anjoman-e Melli-ye Velāyati-ye Gilān* と題する新聞を A. H. 一三二五年 Rajab 月二二日／一九〇七年八月三一日付より四号発行した (Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 278; E. G. Browne, *The Press and Poetry of Modern Persia*, Cambridge, 1914, p. 47)。各地のアンジョマン発行新聞の史料的重要性は既に指摘されている (八尾師 誠「イラン立憲革命と新聞—『*Anjoman*』紙の分析にむけて—」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、一九八三、所収、八四七—八八五頁、参照) が、同紙については筆者未見である。

⑮ Rabino, *MG*, ṣ. 30, 49. 一九〇七年六月にラシュト・アンジョマンは「農民は地主に小作料を支払うべし」という主旨の布告 (e'lān) を貼り出した。また、農民に小作料不払いを呼びかけたラヒーム・シーシェボル Rahim Shishe-bor からアンジョマン代表権をラシュト・アンジョマンが剝奪した (Rabino, *MG*, ṣ. 32) ことも農民に対するアンジョマンの立場を象徴する一例と言える。

⑯ ギーラーンの地主から国民議会に宛てた電報 (一九〇七年三月) 文中に、ギーラーンの農民は立憲制政治の意味を全くの自由であり、税を支払わなくてもよいと考え、謀反を起している、とある (Kermānī, *TBI*, j. 4, ṣ. 119; *MM*, ṣ. 234-235; Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 103)。更に、日付不明であるが内容からして恐らく一九〇七年一〇月頃の手紙文中にも、政府からギーラーンの騒動を鎮静化する命を受けて Karganrūd 地方に向かったある軍長官が同地の住民に「何故このような騒ぎを起すのか」と尋ねた所、「政府が立憲制になった」と返答したと記されている (Afshār, *OTM*, ṣ. 52-53)。

⑰ 州内に一四の支部を有し五百名以上の会員を擁したとされる (Rabino, *MG*, ṣ. 54) アブル・ファズリー・アンジョマンはアーシュラー 'ashūrā のホセイン哀悼行事 'azādār や sine-zan の一派として有名であったことから、知事側からの干渉を免れ自由に政治・社会問題を議論することができたという (Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 36)。同アンジョマンは一九〇七年頃にアッバースィー 'Abbāsī とも名乗り、知事や州アンジョマンの一部と対立し、同年一一月には最高責任者を含む幹部が知事によって逮捕・投獄された。立憲派と目されたギーラーン選出代議士ホサーモル・エスラーム Ḥosām ol-Eslām もアッバースィー・アンジョマンを次の如く敵視した。

「説教壇からホサーモル・エスラームは『アッバースィー・アンジョマンはギーラーンにおける全騒動の火元となった』と述べた。そこに居合わせた聴衆の一人が立ち上がって『地主が農民を抑圧することを

我々は許さないぞ』と言った。」(Rabino, *MG*, ṣ. 55)。この記述からも、ギーラーンの農民運動は社会的運動の特質を有していたとするアーダミヤットがアブル・ファズリー・アンジョマンは農民階層に影響力をもったと主張するのも故なきことではないとせねばならない(Ādamiyyat, *FDE*, ṣ. 68-76 参照)。尚、「ジャンギャリー」運動への農民参加を分析した次の論稿はこの時期の農民騒動を考える上でも、一つの視角を与えてくれる。Cf. F. Kazemi & E. Abrahamian, "The Nonrevolutionary Peasantry of Modern Iran," *Iranian Studies*, XI (1978), pp. 259-304.

⑱ Rabino, *MG*, ṣ. 23.

⑲ Rabino, *MG*, ṣ. 50.

⑳ Rabino, *MG*, ṣ. 52. 司法会議はウラマー・商人・名士・地主・職人の五階層から二名づつの一〇名で構成されると布告された。ミスファハーンでも「公的」アンジョマンとは別にウラマー・商人・同職組合から各々二名づつで構成する Anjuman-i 'Adliye (または Anjuman-i 'Adālatī) (sic) が結成されたという (Lambton, "Persian Political Societies," p. 49)。

㉑ Rabino, *MG*, ṣ. 22.

㉒ Иванов, стр. 149.

㉓ Иванов, стр. 260-261.

㉔ Jahāngīr Qā'im-maqāmi, ed., *Asnād-e Tārīkhī-ye Vaqā'e'-ye Mashrūte-ye Īrān, Nāme-hā-ye Ẓahīr od-Doule*, Tehrān, S. H. 1348, ṣ. 24. テヘラン宛の A. H. 一三二六年 Jomādā'l-Avval 月一日／一九〇八年六月一日付電報文から引用。

㉕ Иванов, стр. 230-231.

㉖ Rabino, *MG*, ṣ. 67-68; Kasravi, *TMI*, ṣ. 672; FO. 248/940, Nos. 110-111; Иванов, стр. 272, 280-281.

この時、バーザールを開けさせる為に派遣されたカザク部隊に向けある若者が発砲したことに端を発して騒動が勃発し、一人の役人と三人の住民が死亡した。サルダーレ・アフハムがラシュトに到着する迄、市内は騒然としており、その模様をラビノは一九〇八年六月二〇日付のテヘランへの通信で次のように報告している。

「……バーザールは目下、閉鎖され町は興奮状態にある。私は現在まで暴動と称されるものを聞いたことがなかったが、(人々の)感情はどんな些細な事件でも重大な混乱に陥りかねない程である。……」(FO. 248/940, No. 122)。

㉗ Rabino, *MG*, ṣ. 69; FO. 248/940, No. 141.

㉘ Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 314.

㉙ この時期の自治状態の一つの例証として、シャーの廃位後、権力奪取の絶好の機会とみてイランに帰国したゼッロッ・ソルターン Ẕell os-Soltān (シャーの伯父) のラシュトでの監禁事件を巡る中央政府と州アンジョマンの遣り取りを挙げておく。立憲制回復後、テヘランに戻り新中央政府に影響力をもったタキーザーデ Seyyed Ḥasan Taqīzāde は州アンジョマンに対して、中央政府の権力強化と命令への絶対服従を理由に政府からラシュトに派遣された特使にゼッロッ・ソルターンを引き渡すように強く迫った。ところが、A. H. 一三二七年 Sha'bān 月四日／一九〇九年八月二一日付の電報において、州アンジョマンはゼッロッ・ソルターンの扱いについて反論するのみならず、逆に中央の地方に対する行政指導の怠慢を難詰し、「ギーラーン・アンジョマンは六か月の間、戦争と革命状態の中で、内外の批判を浴びなかったばかりか、全外国代表から書面の感謝状を得る程の行動をとってきた。」とその自治能力を誇示した (Afshār, *OTM*, ṣ. 175-184)。

㉚ 「アンジョマンと一体となっていた司法や警察」を新しく派遣された知事は知事職への介入であると非難した (Rabino, *MG*, ṣ. 89)。

㉛ Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 132-135.

㉜ 州アンジョマンは一九〇九年二月下旬に早くもテヘラン駐在の主要五か国の外交代表に電報を送り、自らの目的を国民的政治(hokūmat-e melli) の再確立であるとし (Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 171)、同年五月には政府に対し、政府と国民の一致協力によって立憲制の再建を目指すよう呼びかけた (Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 433-436) が、実効がなかった為に再度六月下旬に「我々が安心できるように簡単な言葉で包み隠さず述べられよ」と明快な回答を求める電報を送付した (Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 466-468)。

㉝ シャリーアトマダールの父モッラー・ラフィー Mollā Rafī' はギーラーンで最も名高い宗教指導者と評された (H. L. Rabino, "Rulers of Gilan," *Journal of the Royal Asiatic Society*, (1920) pt. III, pp. 283-284)。しかし、シャリーアトマダールは FO. 248/940, Notables of Gilan, No. 159 中でモジュタヘドとして紹介されているものの、その活動については史料上から不詳。

㉞ Rabino, *MG*, ṣ. 92-93. ラビノはその理由を体制の変化に伴って、彼が様々な名目で政府から得ていた収入に損害が生ずるのを恐れたことに求めている。

㉟ Rabino, *MG*, ṣ. 77.

㊱ Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 142-143.

㊲ ハッジー・ホマーミーについては、Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 94-101 参照。この時期に全国的に顕在化しつつあったウラマー層の分裂的傾向の一環とも言えるナーセリーヨでの抗議行動はラシュト・アンジョマンへの不満がその発端であった。以下の文献の該当箇所参照。Rabino, *MG*, ṣ. 12-13, 103-104; Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 100; Kermānī, *TBI*, j. 4, ṣ. 128; *MM*, ṣ. 250; S. A. Arjomand, "The Ulama's Traditionalist Opposition to Parliamentarism : 1907-1909," *Middle Eastern Studies*, XVII, 2 (1981), p. 178.

㊳ Rabino, *MG*, ṣ. 93, 96.

㊴ Rabino, *MG*, ṣ. 69; FO. 248/940, No. 111.

㊵ Ādamiyyat, *FDE*, ṣ. 12, n. 1. 同所によればヴァキーロッ・トッジャールはカフカズと取引きのあった商人で、バクーのロシア人学校で教育を受け、カフカズの社会民主主義的な思潮に感化されていたと言われる。

㊶ Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 36; Tadayyon, *NG*, ṣ. 301.

㊷ 本稿五三頁参照。

㊸ ただ、サッタール委員会の一員、ラヒーム・シーシェボルが一時期アンジョマンに参加していた(一章註⑮参照)が、彼がこの時期にモジャーヘドであった確証はない。一方、ラムトンは「ラシュトのアンジョマンの一部はバクーの社会民主党と関係を有していたと言われる」とする (Lambton, "Persian Political Societies," p. 51)。勿論、その可能性も否定できないが、人物を特定することは困難であるように思われる。ともあれ、一九〇七年春にアンジョマンの要求でモジャーヘドの指導者が逮捕・投獄された(他史料からは確認できず)という記事 (Иванов, стр. 154) もあり、敵対関係とまでは言えないにしろ、少なくともこの時期のアンジョマン上層部とモジャーヘディーンとの人的交流は殆ど無かったように思える。

㊹ Rabino, "PCP," p. 79.

㊺ Rabino, *MG*, ṣ. 26-28 所収の A. H. 一三二五年 Rabī' oth-Thānī 月八日／一九〇七年五月二一日付の声明文において、アルメニア人、ユダヤ人等も国民、国家の権限や権利については法の庇護下にあると主張している。

第二章　ラシュト蜂起とモジャーヘディーン

(一)「社会民主主義」グループ

ギーラーンにおける「社会民主主義」グループとしてのモジャーヘディーン（または fedā'iyān とも呼ばれた）の組織や活動を詳細に伝える史料は、その秘密性とも相俟って、極めて限定された状況にある。ただ、ラビノはラシュト周辺にも影響力のあった組織の一つとしてモジャーヘディーンを挙げ、彼らも ejtemā'iyūn-e 'āmiyūn, sho'be-ye qafqāz と名乗っていたとし[1]、次のように記す。

「fedā'ī たちは二つの会議（majles）をもっている。一つは公然（'omūmī）であり、人々の面前で議論する。望む者は誰でも、その場に出席できる。もう一つは別の厳しい諸規則をもった秘密（makhfī）のものであり、もしその秘密組織に加入を望むなら、まずその委員会に加入許可を申請し、委員会は内部で投票する。もし投票によって（加入が）受け入れられれば、その者が加入できるように許可を取る為に、彼の名をバトゥームへ伝える。その会議の人々は彼らの会議の場所を漏らさないことを誓う。もし彼らのうちの一人が何か漏らしたなら、彼を除名にする。[2]」

右の引用文中の公然のものについて、イラン近代史研究の第一人者アーダミヤットは、正確であると思われないとし、「演説会」（maḥfel-e notq o kheṭābe）のようなものと推測する。[3] 確かに、一九〇七年九月にマシュハドで決定されたモジャーヘディーン規約中にも、公然組織の規定は見出せないが、ただ同規約第五条において、「支部は二つの会議をもつ。即ち特別のもの（khoṣūṣī）と一般のもの（'omūmī）」[4]（但し両者とも秘密）と定められていることは、ラビノの記す所と考え合わせると興味深い。ともあれ、秘密組織の委員会は、ある時期から―恐らく一九〇八年後半以降―サッタール委員会と名付けられた。[5] また、アンザリーにも支部が存在し、その秘密組織はバルク委員会（komite-ye Barq）と呼ばれ、会員中には両替商（ṣarrāf）や雑貨屋（kharrāz）等も含まれ、ザカフカズの社会民主党代表も参加したという。[6]

ラシュトとアンザリーの両秘密委員会の組織について、蜂起指導者の一人であったアルメニア人エプレム Yeprem は自らの手記の中で次のように説明する。

「イラン人同志の援助・支援によって、我々はサッタール委員会という名称の七人から成る委員会を結成した。その委員会の会員のうち、三名はアルメニア人、他の四名はムスリムである。この委員会は、私がその詳細についての議論に参加するのを望まなかった為に、何度も解散されては新たに結成された。その委員会は五度解散された後に、再び結成された。しかし実際には何事も十分に為し遂げていなかった。いずれにせよ、この委員会は自らの力の及ぶ範囲では、自己の任務を果たしていたことも銘記しなければならない。

元来、サッタール委員会は社会民主主義者たち（sousiyāl demoukrāt-hā）の信条に従って、自らを社会民主主義の委員会と名乗っていた。この問題の原因を多数のグルジア人のラシュトへの到来と彼らの影響力の増大だと看做さなければならない。しかし彼らは実際には我々（即ち、ダシナク……筆者註）の綱領を使い、ダシナクの内規を受け入れて、実行していた。サッタール委員会は何も為し得ずに、激しい行動を避けていると考えられたので、私はアンザリーに行って、バルク委員会という名の委員会を同地に作った。この委員会も、その会員のうち、三名がアルメニア人、四名がムスリムである七名から成っていた。バルク委員会とサッタール委員会との主要な相違は、バルク委員会が実際には革命的社会主義者たち（sousiyālist-hā-ye enqelābi）の綱領に従っていたことである。

自らを社会民主主義者（ejtemā'-ye 'āmiyūn, sousiyāl demoukrāt）と名付け、同様の名称で印を準備していたサッタール委員会はバルク委員会を自らの支部と宣言した。

バルク委員会がこの事を知り、手紙をサッタール委員会の方から受け取ったとき、その委員会の決定の実行を拒み、自ら単独で、別個に活動し始めた。この結果、二つの委員会間で、論争が起り、それが現在までも続いている。⑦」

サッタール委員会等の成立事情を伝える数少ない史料の一つである以上の記述から、エプレムもアルメニア民族主義団

体ダシナクの一員であった為に、自らの指導下で組織を結成したことやダシナクの指導性の強調等は差し引いて考えるとしても、少なくとも以下の二点は是認できよう。その第一は、ラシュトのサッタール委員会は独自の綱領や規約をもっておらず、自ら「社会民主」という名を冠していたものの、「五度の解散」や「何事も為し遂げなかった」ということからすると、政治方針や活動の点で必ずしも確固としたものではなかったと思われることである。第二は、社会民主主義のサッタール委員会と社会主義のバルク委員会との路線対立という図式の真偽はともかく、両者が激しい緊張関係の状態にあった事実である。この対立は、アンザリーのモジャーヘディーン自身が知事ザヒーロッ・ドウレに宛てた手紙文中で、「抑圧を事とする反動派（mostabeddīn）が参加した時から、ラシュト支部を党派（ferqe）の隊列にないものと考える。[8]」と述べていることからも確認できる。「反動派」が誰を意味し、「反動派」なる規定が妥当なのか等については不明であるが、先に述べた第一の点と第二の点を合わせ考えると、ラシュトの「社会民主主義」グループまたはサッタール委員会はアンザリーのそれに比して、政治的に穏健であったと言えよう。この点を更に解明する前に、サッタール委員会の構成員について次に考察しておきたい。

サッタール委員会は以下の者から構成されていた。

Mīrzā Karīm Khān（委員長）、Mo'ezz os-Solṭān, 'Amīd os-Solṭān, Aḥmad 'Alī Khān, Seyyed Yaḥyā Nedāmī Nāṣer ol-Eslām, Ḥoseyn Kasmā'ī, 'Alī Moḥammad Tarbiyyat, Ḥājji Ḥoseyn Eskandānī, Javād Khān Nāṣer ol-Molkī, Mashhadī Mokhtār Ardabīlī, Āqā Gol Mīkhforūsh Eskandānī, Raḥīm Shīshe-bor, Mīrzā Moḥammad 'Alī Maghāze[9]

以上のメンバーのうち、ミールザー・キャリーム・ハーン以下四名は、サミー Samī' 家と並ぶ当時のラシュトの二大名門の一つオムシェ Omshe 家の成員であり、ハッジー・ヴァキール Ḥājji Vakīl のそれぞれ四男、次男、三男、五男であった。オムシェ家の始祖ハッジー・アーガー・ジャーニー Ḥājji Āqā Jānī はラシュト近郊のオムシェ村の農民出身で、

後に村長（kadkhodā）になったが、その次男アリー・アクバル ʻAlī Akbar はアンザリーやカスピ海沿岸の関税徴収を請け負い、財を成した。[10] 彼らはアリー・アクバルの甥に当り、その恩恵を受け、アミードッ・ソルターンやアフマド・アリー・ハーンはアンザリー、ランガルード、レシュテ・ネシャー等の代官職に任命され、[11] モエゾッ・ソルターンも立憲派の怨嗟の的となったベルギー人 Naus の下でかつて税関で働いていた。[12]

ホセイン・キャスマーイーは商人（tājer）の生まれであったが、ラシュトのサーレハーバード Ṣāleḥābād（オスタードサラー区にある）のマドレセで学んだ後、聖地ナジャフへ赴き、諸学を修めてモジュタヘドとなり、ラシュトへ戻ってエマーム・ジョムエ emām-jom'e 職に就いていた。しかし、ロシア、ヨーロッパに旅行をした後に、立憲派の隊列に加わり、「アバー（ʻabā）とターバン（ʻammāme）をコートとズボンに取り替えた」という。クーデタ後、彼はパリへ逃がれ、新聞売りで生計を立てていたが、ザカフカズと連絡を取って、秘かにラシュトに帰還していた。[13]

イヴァノフは彼らを「封建階層の代表キャリーム・ハーン、彼の兄モエゾッ・ソルターン、地主ブルジョワジー層の代表ミールザー・ホセイン・キャスマーイー」と紹介し、その出自の故に、ダブリーズ蜂起の指導者に比して封建的であったかのように述べている。[14] 確かに、ラシュト蜂起の指導者はタブリーズ蜂起の指導者サッタール・ハーンやバーケル・ハーン Bāqer Khān のような名も無い無学文盲の人々ではなく、むしろ先に述べた略歴からすれば一応、地方的名士の部類に属すると言ってよい。[15] とすれば、以上のような出自であった彼らが何故、モジャヘディーンを組織し、徹底した武力闘争を展開したかという問題の説明がつかない。タブリーズ蜂起の発生、ザカフカズからの支援が決定的誘因になったことは疑いないが、蜂起計画自体は後にも述べるように地元のサッタール委員会が主導的に作製したと考えられる以上、[16] その問題解明の糸口は、出自よりもむしろ、彼らの外国との接触による知的自覚、換言すれば広い意味での「知識人」的側面に求められるべきではなかろうか。キャリーム・ハーン、モエゾッ・ソルターン、ホセイン・キャスマーイーは蜂起までに最低一、二回はヨーロッパへ旅行していた。[17] また、ホセイン・キャスマーイーはフランス語、ロシア語を学び、美術

を修め、フランス革命史を研究しイランに革命を生み出す条件を考えるのに時間を費やしていたとさえ言われているからである。[18]

次に、そのような「社会民主主義」グループの政治的主張や要求は如何なるものであったのであろうか。一九〇六年一二月のいわゆるバクー綱領や一九〇七年九月のマシュハド綱領は前掲のエプレムの証言からすれば、どこまで彼らの組織に反映されていたのか定かでない。[19] ただラシュトのモジャーヘディーンの機関紙『*Mojāhed*』創刊号[20]（A. H. 一三二五年 Shavvāl 月九日／一九〇七年一一月一五日付）が僅かながらその解答の一端を明らかにしてくれる。

まず、その巻頭において、モジャーヘディーンの目的は三つの言葉「神（khodā）、祖国（vaṭan）、人間性（ensāniyyat）」の普及にあるとし、「財産も生命もなげうって奮戦する者（mujāhidīn）をアッラーは家に居残る連中（qā'idīn）より何段も上に嘉し給う」[21]というコーランの章句を引用し、シーア派ウラマーがアリーを三人のカリフより優れているとする証拠の一つもこの章句にあると強調する。そしてモジャーヘディーンの功績として、イスラーム以前のギリシアとの戦争におけるイラン人の勇気やイスラーム期の聖戦、近年のイランでの立憲派の勝利、ロシアでの議会（Дума）の確立等を列挙する。ここに見られる「モジャーヘディーン」の理解は高次元の政治的問題を隠蔽し、一般民衆の中に浸透を図らんとする戦略的見解とも解しえようが、逆に、当時の一般的な立憲制理解が反映された一典型とも看做しえよう。つまり、「神」に代表されるイスラームの伝統的価値観、殊にシーア派イスラームがまず第一に称揚され、次にそれと並んで、「祖国」やイスラーム以前、後のイラン人の民族的優秀さの強調にみられるナショナリズム、及び「人間性」やイランの立憲制、諸外国での議会確立等に示される近代的政治思想が唱えられているのである。このことはラシュトのモジャーヘディーンがザカフカズからの単なる「影響」だけでなく、イランの実状に即した思考方法をも兼ね備えていたことを示唆しているのである。

この点は彼らの政治的主張にも見出せる。即ち、専ら国民議会と憲法の擁護を掲げるだけで、自らの綱領（marāmnāme）

に従うとしているものの、それ以外のマシュハド綱領で提起された政治的要求は見られない。逆に、地主・農民関係に関して「地主が不正や抑圧を行なわない限り、農民は彼らに対して不満を言う権利を有しないと法は定めている」と主張し、バクー綱領以上にイランの現実に適合していたと言われるマシュハド綱領第七条の「生活維持に必要である以上の広さを所有している地主の土地・村落は銀行を通じて買い上げ、農民に再分配すること」[22]という内容と著しく乖離しているのである。このような独自性や土着的要素はギーラーンの中心的産業の一つである養蚕業の改良の提言の中にも一層鮮明に表われてくる。

「この州の地主たちは約四〇万トマーンの自らの金を蚕卵の代金として外国へ送っている。もし何人かの農業や蚕卵業の教師を招いて、正しい学校を作り、同じ所でその気候に馴染んだ国産の繭から科学的に卵を取るならば、費用の四分の一は省かれ、全体の利益は地方の人々の収入となり、商人の連携も一つとなり、工場を作り、国家を繁栄させ、国民を不足から解放するであろう。」

この提言は当時の養蚕業について正鵠を得た指摘[23]であり、モジャーヘディーンが経済事情についても見識を具えていたことを示している。ここで、以上の検討を通じて確認できる点を小括しておきたい。ギーラーンにおける「社会民主主義」グループとしてのモジャーヘディーンは少なくともラシュト、アンザリーに組織を結成していた。特にラシュトの組織はアンザリーの組織に比して、その政治的見解や主張が示す如く、穏健的、逆に言えば、イランやギーラーンの現実に即応した土着性の強い立場をとっていたことが分かった。このような立場から一転して武装蜂起に移行した背景には、指導者の「知識人（ロウシャンフニクル）」的役割が指摘できる一方、その物質的基礎を形成したのがザカフカズからの支援部隊であった。

（二）ザカフカズからの支援部隊

ザカフカズからの人的物的支援はサッタール委員会委員長であったキャリーム・ハーンのザカフカズへの派遣と同地の

革命家との会見、援助要請によって実現した。[24] この派遣の目的はそれだけではなかったようである。一九〇八年一一月頃のものと考えられるバクー及びティフリス発のキャリーム・ハーンからの、第一次国民議会アゼルバイジャン選出代議士であり、当時イギリスに亡命中であったタキーザーデに宛てた手紙[25]の中で語られている三千ルーブル（manāt）の「取引」（tejārat）は、これらの手紙の編者も注釈するように、武器・弾薬の買付けであったことを暗示している。バクーからの手紙には、

「いずれにせよ、あの取引にとってこの情況下でそれが成功するには多大な努力を要します。バクーにはあらゆる形のものがありました。条件つき販売と千ルーブルの保証で三千ルーブルが得られました。三五〇ルーブルはここ一五日間に出費されました。」

とあり、ティフリス発の手紙には、「取引について、近々行なわれます。多分、大きな利益となると思います。合同の資本は三千ルーブルでした。六〇〇ルーブルが物を買う為にラシュトで使われ、三五〇ルーブルも出費されました。二千ルーブルの資本が現金で与えられています。」と述べられている。このようなキャリーム・ハーン等の活動に伴って、最初の派遣部隊が一九〇八年九―一二月の間に、約二〇～三五名[26]到来したと推考される。彼らはラシュト市内の三か所の拠点（サブズ・メイダーン Sabz Meydān 区のミールザー・ユーソフ・ハーン Mīrzā Yūsof Khān 邸、ハッジー・ヴァキール邸の庭園、キャリーム・ハーン邸）に秘密裡に分宿し、ザカフカズから武器を輸送すること、専門別に武器・弾薬を製造すること、また行商人に変装して居住区や通りで情報を収集することに従事した。[27] 彼らの参加によってサッタール委員会の下に二次委員会（komisiyūn-hā-ye far'ī）として財務委員会（komisiyūn-e mālī）と軍事委員会が作られた。軍事委員会には民族別・出身地別に代表が選出され、その指導部はホセイン・キャスマーイーとエンテサーロッ・ソルターン Enteṣār os-Solṭān（ギーラーン代表）、エプレム（アルメニア人代表）、ヴァリコフ（グルジア人代表）、サーデコフ Ṣādeqof（カフカズのイラン人代表）、セイエド・アリー・モルタザヴィー Seyyed 'Alī Morteẓavī（アゼルバイジャン代表）によ

って構成された。[28]

支援部隊の協力を得てサッタール委員会は蜂起計画を練ることに着手した。最も計画において克服されなければならなかった点は第一に、知事サルダーレ・アフハムの数百名に及ぶ重装備の兵力を、絶対的少数のモジャーヘディーン部隊が如何にして打破するかという問題であり、第二に、当時、有数の兵員を擁していたギーラーン北部のターレシュ地方の部族とタブリーズ蜂起鎮圧の任から部隊を引き揚げて、自らの故郷であるトノカーボン地方（ギーラーン東部の隣接地域）に居たセパフダールに如何に対処するかという問題であったと考えられる。第一の問題は情勢の変化を素早く捉えることと計画そのものを奇襲攻撃にすることで解決された。蜂起の直前のアーシューラーの日（一九〇九年二月一日）に、サーガリーサーザーン区の行列とアゼルバイジャン人の行列の間に衝突が起り、治安に当っていた兵士の発砲した弾丸が一人に命中して死亡した。怒った大群衆が犯人の引き渡しを知事に迫ったが、知事は応じようとしなかった。この為に群衆はモジャーヘディーンの指導者に武器を要請したという。[29] この事件は多くの史料が蜂起に至る序章として強調する所であり、数日後の蜂起に大義を付与し、住民の支持を獲得するのに役立ったに相違ない。一方、蜂起計画は以下のように作製されていた。まず知事側の部隊に総指揮・命令権をもつサルダーレ・アフハムを部隊から引き離しておく為に、サルダーレ・ホマーユーン Sardār-e Homāyūn[30] またはサルダーレ・モォタマドを通じて情報を得ていたモディーリーエ庭園（市郊外にあった）において宴会が催される日が蜂起決行の日と決定された。そして蜂起部隊を三か所の拠点から出撃させ、第一の部隊はモエゾッ・ソルターンを指揮官として、モディーリーエ庭園に向い、サルダーレ・アフハムを殺害する。第二の部隊はホセイン・キャスマーイーを、第三の部隊はアリー・モハンマド・タルビヤットとエプレムを指揮官として、知事庁舎の前後を急襲し、モディーリーエ庭園での爆音を合図に攻撃を開始する計画になっていた。[31] この計画が極秘裡に作られ、少数によって実行されたことが蜂起成功の要因の一つであったとマレクザーデは指摘している。[32] 第二の問題は、サッタール委員会からターレシュの部族にはエプレム他二名が、[33] セパフダールの許にはナーセロル・エスラームが派遣され、[34]

交渉の結果、両者とも支援を約束したことで結着がついた。特にセパフダールの支持は多大な影響力を発揮し、この情報が伝わるや否や、それまでに立憲制の復活を要求してトルコ代理領事邸の庭に避難していた約八〇名のトッラーブや小商人に、新たに約二〇〇名が参加することを決定した（一九〇九年一月）[36]。

かくして、困難とされた問題が除去された後に、蜂起が A. H. 一三二七年 Moharram 月一六日／一九〇九年二月七日[36]に勃発した。蜂起の参加人員（五〇～七五名）や経過については諸史料中でやや差違がみられる（これは当然で、当時現地で目撃したと思われるイギリス代理副領事ガードナーでさえ「事実に到達するのは不可能」と報告している）ものの、大筋においては計画通り実施されたようである。モディーリーエ庭園でサルダーレ・アフハム他数名が殺害され、知事庁舎では約三時間の戦闘の後に庁舎に火が放たれたことによって守備部隊は敗走した。ラシュトの主要な公共施設は解放され、庁舎にあった現金や武器・弾薬は奪われた。蜂起後、軍事委員会は公然化し、治安保持に当り、既に述べた如くアンジョマンが再建され、自治権力の中核となった[37]。

以上の蜂起及びそれに至る過程からも明らかなように、ザカフカズへの支援要請、武器・弾薬の買付け、軍事的脅威に対する事前工作、入念な秘密計画作製等、蜂起自体はサッタール委員会を中心としたモジャーヘディーン部隊による極めて計画的な所産であったと思われる。その際、サッタール委員会がモディーリーエ庭園での宴会に関する情報入手や交渉団の派遣にみられる計画上の主導権を確保し、ザカフカズからの支援部隊がそれに対し軍事的技術的協力を行なったというのが実態であろう。ラシュト蜂起は、既にブラウンが「明らかに注意深く計画された」性格をもつと特徴付けたが、タブリーズ蜂起の「自然発生」的性格[38]と著しい対照をなすと言える。勿論、これは蜂起自体の形態的な性格であって、それが成功した重要な前提であると思われる立憲運動やその後のテヘラン進軍への住民参加の意義を否定するものでないことは言うまでもない。

① Rabino, *MG*, ṣ. 110.　　② Rabino, *MG*, ṣ. 102.

ンは屑動したが、ラシュトのそれが沈黙を守っていたことも一つの状況証拠となろう (Rabino, *MG*, ṣ. 15–16; Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 64–67)。

⑨ Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 113. 若干の異同があり、当時、立憲派新聞として高い評価を受けた『*Nasīm-e Shemāl*』紙の主幹アシュラフ・ディーン・ホセイニー Ashraf od-Dīn ol-Ḥoseynī を加えるもの (Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 148; Tadayyon, *NG*, ṣ. 231)、エプレムをグルジア人ヴァリコフ Vālīkof を加えるもの (Kasravī, *THSA*, ṣ. 8) もある。

⑩ Rabino, "PCP," p. 79.

⑪ Rabino, *MG*, ṣ. 17, 34, 36.

⑫ FO. 248/940, No. 41.

⑬ ホセイン・キャスマーイーについては以下の文献を総合した。
Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 264–265; E. Fakhrā'ī, *Gozīde-ye Adabiyāt-e Gīlakī*, Rasht, S. H. 1358, ṣ. 35–40; Jahāngīr Kasmā'ī, "Sharḥ-e Ḥāl-e Marḥūm Mīrzā Ḥoseyn Khān Kasmā'ī," *Yādgār*, j. 4, sh. 4 (1947), ṣ. 71–75.

⑭ Иванов, стр. 354.

⑮ ただ、ホセイン・キャスマーイーが地主ブルジョワジー出身であるとは言い難い。尚、経済的基盤について付言するなら、キャリーム・ハーン等はオムジャ家の一員であったとはいえ、その本流はアリー・アクバルの未亡人を娶り財産を相続したサルダール・マンスール Sardār-e Manṣūr 及びアリー・アクバルの娘を娶ったサルダール・モータマド Sardār-e Mo'tamad にあった。サルダール・マンスールはカスピ海沿岸の税関請負やリアゾフ (Лианозов) 漁業利権の下請等で年間一〇万トマーン以上の収入を得ていたという (Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 37–38)。

⑯ Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 169 によると「明らかに立憲派指導者

③ Ādamiyyat, *FDE*, ṣ. 21. アーダミーヤットの見解を裏付ける一例が Rabino, *MG*, ṣ. 98 に見られる。即ち、一九〇七年一月に市内のザーグダーン区のサフィー Ṣafī モスクでモジャーヒディーンがモッラーと国家の旧秩序に反対する演説 (noṭq-hā) を行なったという。

④ Е. Бор-раменский, Иранская революция 1905–1911 гг. и большевики Закавказья, *«Красный Архив»*, 1941, № 104, стр. 57.

⑤ ラシュトにおける「社会民主主義」グループとしてのモジャーヒディーンは一九〇六年末頃には存在していたと推定される。というのは、一九〇六年一〇月にバトゥームからクッジー・ホマーミーの所に届いた約束状の中で「我々の仲間 (ādam-hā) がラシュトにいる」と述べられ (Rabino, *MG*, ṣ. 91)、同年一一月に百着のフェダーイヤーンの衣服が準備されたと記されるからである (Rabino, *MG*, ṣ. 4)。また、一九〇七年八月にモジャーヒディーンの一員であったある反物商 (bazzāz) が逮捕された為にミールザー・ホセイン・ハーン・キャスマーイー Mīrzā Ḥoseyn Khān Kasmā'ī が他のモジャーヒディーンと共に奪還に出かけた (Rabino, *MG*, ṣ. 40–41) とあるから、キャスマーイーがこの時期既にモジャーヒディーンの指導部に参加していたことが判明する。その後については史料上に記述がない為に彼らの活動は不分明であるが、サッタール委員会と命名されたのは、サッタールがかのタブリーズ蜂起の英雄サッタール・ハーン Sattār Khān に由来することがほぼ見解の一致する所である以上、一九〇八年後半にかかるものと想定しても大過なかろう。

⑥ Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 114.

⑦ Yeprem, *AT*, ṣ. 23–25.

⑧ Qā'im-maqāmī, *Nāme-hā-ye Ẓahīr od-Doule*, ṣ. 11. 尚、一九〇七年四月にシャーの招請で再び首相の地位に返り咲いたアミーン・ッルターンのアンザリー上陸阻止行動をアンザリーのモジャーヒディー

がカフカズの社会民主党と接解する前に秘密アンジョマンが作られ、ギーラーン革命（enqelāb-e Gilān）の計画が準備されていた」と地元の主導性が強調される。また、ラーイーンが Rā'in, *YKhS*, ṣ. 63–64; E. Rā'in, *Heydar Khān 'Amū Ūghlī*, 3rd ed. Tehrān, 2535 Sh., ṣ. 108–110, 142 においてイラン人社会民主党党員であったヘイダル・ハーンがモフセン・ナジュマーバーディー Mohsen Najmābādī なる者をバクーからラシュトに派遣して革命運動の指導に当らせたとした点に対して、ファフラーイーは自著 *Sardār-e Jangal, Mīrzā Kūchek Khān* の第五版（S. H. 1354）にはない恐らく最新版の巻末に付加されたのであろう書評（ṣ. 549–551）において、(1)革命指導は一個人によって可能になるものでない、(2)ナジュマーバーディーなる者の名前はギーラーンの立憲運動の中では発見できないし、ヘイダル・ハーンも関与していないと反論し、ザカフカズからの援助があったことを認めつつも、基本的に「ギーラーン立憲運動は諸党派、秘密アンジョマン、人民諸階層によって惹起された」とする。

⑰ Browne, *PR*, p. 436; Tadayyon, *NG*, 334; Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 199; Div Sālār, *YT*, ṣ. 59. キャリーム・ハーンに関する諸文献からの抜粋が Afshār, *OTM*, ṣ. 16–25 に集成されているので合わせて参照されたい。

⑱ むろん、彼らの個々人の偶発的な資質の次元の問題にとどまらず、ラシュトの地理的、社会・経済的な位置にも関連することに注目しなければならない。そのことはイラン人研究者自身が指摘する所である。曰く「ラシュトとアンザリーの社会的発展水準は他都市に比して高いように思える。ラシュトがカフカズとロシアとのイランの商業的中心地であっただけでなく、ギーラーンの総ての生糸は同地からヨーロッパへ輸出され、常に外国人の一団が同地に居住していた」（Adamiyat, *FDE*, ṣ. 22）、「この地方はヨーロッパに近いこと、あらゆる民族・文化の旅行者が往来するという点から、外国人、イラン人旅行者が民主的で自由な世界から土産に持ち帰った自由な思想の中心地であった。この為にラシュトの鋭敏な人々はこのような思想を受容するのにイランの他のどこよりも適していた」（'Abd ol-Ḥoseyn Navā'i, "Enqelāb-e Gilān che-gūne āghāz shod?" *Yādgār*, j. 4, sh. 3 (1947), ṣ. 44）。

⑲ ラヴァーサーニーは一九〇八年初めにラシュト組織のスタンプが付されたマシュハド網領・規約の一見本をロシア外交官が入手したという事実を以て、ラシュトも含めてイラン各都市でモジャーヘディーンの活動が強化された証左とするが、網領が反映された活動の具体例は殆ど提示されていない。Schapour Ravasani, *Sowjetrepublik Gilan, Die sozialistische Bewegung im Iran seit Ende des 19. Jh. bis 1922*, Berlin, 1973, S. 149–150.

⑳『*Mojāhed*』sh. 1, D. Bozorg, ed., *Asnād-e Tārīkhī-ye Jonbesh-e Kārgarī, Sosiyāl Demokrāsī va Komūnīsī-ye Īrān*, j. 6, 2 nd ed, Tehrān, S. H. 1358, ṣ. 11–15 所収。タイトル・ページに Mojāhedīn-e dār ol-marz Rasht と発行主体が明記されているからモジャーヘディーンの「機関紙」とみてまず間違いなかろう。同紙は五号のみ発行されたが、他号は筆者未見である。以下、同紙からの引用は特に註記しない。

㉑『コーラン』フリューゲル版第四章第九七節。訳文は井筒俊彦訳『コーラン』上、岩波書店、に従った。この章句がマシュハド綱領前文にも引用されていることは興味を惹く（Бор-раменский, указ. статья, стр. 54）。因みに、マシュハド綱領はバクー綱領と比較して「信仰の自由」の要求もなく、組織構成員の条件に真のムスリムであることを掲げていた。См. С. Алиев, Независимый документ об иранской социал-демократической партии（《Эджтимаон-е Амиюн》）, 《*Ha-*

роды Азии и Африки》, 1965, № 2, стр. 133-139.

㉒ Бор-раменский, указ. статья, стр. 55; 八尾師「イラン立憲革命におけるタブリーズ蜂起」七五頁。

㉓ イラン全体の絹生産量の八〇%以上を占有したギーラーンの絹関連産業は一八六五年を境にして蚕死病 (muscardine) の蔓延により長期停滞を辿った。しかし、日本産、次いでトルコ産の蚕卵輸入により、一八九〇年代以降、生産量は回復の兆しをみせたものの、価格の大幅下落、蚕卵輸入の増大・品質悪化等に伴い不振を極めた。従って蚕卵の管理・技術改良は地方経済にとって死活的問題であった訳である。また、一九〇八年時の蚕卵輸入額は約三三万トマーンであり、四〇万トマーンという情報は精度が高い部類に入ると言えよう (S. M. 'Ali Jamālzāde, *Ganj-e Shāygān*, Berlin, A. H. 1335, ṣ. 27)。尚、イランにおける絹産業については、最近、専論が発表された。Cf. Ahmad Seyf, "Silk Production and Trade in Iran in the Nineteenth Century," *Iranian Studies*, XVI, 1-2 (1983), pp. 51-71.

㉔ ザカフカズの如何なる組織と接触したかは定かでないが、一説によるとスターリン (И. Сталин) や一九〇九年秋にラシュトに到来し、革命宣伝や「インターナショナル・クラブ」なる革命学校を組織したとされるオルジョニキッゼ (Т. К. Орджоникидзе) と会見したという (Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 115)。

㉕ 手紙には日付が書かれていないが、消印が一一月四日であること、ティフリスから「Karim」名の電報が一九〇八年一一月二三日付でタキーザーデに送られていること等から、一九〇八年一一月頃の手紙であると推定される。手紙テクストは Afshār, *OTM*, ṣ. 12-14. 以下の引用も同所。

㉖ ラシュトへの支援部隊は総数で約六〇～一二〇名、一九〇八年一二月の最初の戦闘員集合時の人数と内訳は、グルジア語新聞《*Аxaлu Сxaли*》紙（一九一〇年二月六日）によれば、グルジア人一六（ロシア社会民主労働党 РСДРП 党員一一、同党シンパ五）、ロシア人三（アナキスト系）、アゼルバイジャン人一（ヨスエル）、ユダヤ人一、ドイツ人一の総計二二名と言われる (Ф. Б. Белелобский, Н. К. Белова, Первые связи социалистов с национально-освободительным движением (до образования Коминтерна), 《*Народы Азии и Африки*》, 1970, № 4, стр. 52, прим. 32)。ブラウンはキャリーム・ハーン等が約七〇名のモジャーヘディーン（内訳不明）を彼等の邸宅に三か月間滞在させていたとする (Browne, *PR*, p. 436)。従って、時期については一応一一―一二月と想定できるが、一九〇八年九月二九日付のギーラーン領事館書記の報告中に、「二週間前にバクーのモジャーヘディーンの派遣団がラシュトへ到着した」(Бор-раменский, указ. статья, стр. 65-66) ともみえるので九―一二月と幅をもたせた。一方、人数については諸史料によって若干の差違がある。マレクザーデは約三〇、ファフラーイーは三五（うち一四の名前を挙げる）、キャスラヴィーは約五〇、エプレムは五五（グルジア人三五、アルメニア人二〇）、アミールヒーズィー E. Amīrkhīzī は約二〇～三〇またはそれ以上、とする。ブラウンの約七〇も含めて五〇～七〇名という数字は恐らく蜂起直前の総数と思われるので、ここでは約二〇～三五名と比定した。

㉗ Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 114, 117.

㉘ Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 114; Kasravī, *THSA*, ṣ. 12; Malekzāde, j. 5, ṣ. 175-176. 但し、後二者はギーラーン代表をモヨゾッ・ソルターンとするが、これはカズヴィーン方面への進軍開始時のことではないかと推測される。

㉙ Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 117-118; Kasravī, *THSA*, ṣ. 9; Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 158; Div Sālār, *YT*, ṣ. 53-54.

㉚ サルダーレ・ホマーユーンはナーセロッ・ディーン・シャー Nāṣer od-Dīn Shāh（在位一八四八―九六）の甥にあたり、フーマンの知事であった。モディーリーエ庭園（かって彼が Modīr ol-Molk という laqab を持っていたことから命名）は彼の所有する広大な庭園であった。

㉛ Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 119.

㉜ Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 159.

㉝ Rā'in, *YKhS*, ṣ. 75-79. 同所によればターレシュの部族の助力を得て蜂起する計画も練られたが未遂に終ったという。

㉞ Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 156; Div Salār, *YT*, ṣ. 51.

㉟ FO. 248/940, No. 180; FO. 248/970, Nos. 209-210.

㊱ イラン側史料は総て Moḥarram 月一六日または Bahman 月一九日と記録しており、西暦に直すと二月七日になる。事実 *The Press and Poetry of Modern Persia* の Moḥammad 'Ali Tarbiyyat の手になる序文中にも、立憲革命の重要事件の一つに「ギーラーン革命」が挙げられ、その日付は「Muḥarram 16, A. H. 1327 (= Feb. 7, 1909)」(p. 4) とされている。ところが、欧文史料では現地からの領事報告も含めて二月八日と記されているのである。この理由を解明する手掛りを筆者は現在見出すに到っていないが、取敢えずここではイラン側の記録に従って二月七日としておきたい。

㊲ 詳細については以下を参照。Rabino, *MG*, ṣ. 74-76; Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 117-121; Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 303-304, 312-314; Kasravī, *THSA*, ṣ. 9-10; Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 161-162; Div Salār, *YT*, ṣ. 54-56; Tadayyon, *NG*, ṣ. 238-239; Yeprem, *AT*, ṣ. 26-27; Navā'i, "Enqelāb-e Gilān," ṣ. 41-52; Taqī Dānesh, "Vāqe'e-ye Bāgh-e Modīr ol-Molk va Qatl-e Sardār-e Afkham," *Yaghmā*, sāl-e 2, ṣ. 197-199.

㊳ Browne, *PR*, p. 292.

㊴ 八尾師「イラン立憲革命におけるタブリーズ蜂起」七八―七九頁。

第三章　テヘラン進軍

立憲革命史の重要な構成部分の一つをなすテヘラン進軍について本章では考察を試みたい。まず、その経過について概観してみよう。

ラシュトを占領下においたモジャーヘディーン部隊は同地にとどまることなく、カズヴィーン、テヘラン方面へ進軍を開始する。しかし、彼らが当初よりテヘランを射程に入れて進軍を企図したのではなく、むしろタブリーズのような政府軍の包囲攻撃を回避すべく予防的行動に出たのであったことを次のエプレムの回想は端的に示している。

「私はカズヴィーン方面へ出発する準備をした。イラン人の同志たちは私に反対をしていた。彼らは市に残留し、そ

こで政府軍と対抗しようとしていた。私は市内にとどまることの危険性を説明し、例としてタブリーズの場合を指摘した。結局、激論の末、彼らは私と協力して市から出ることに同意、決定した。[1]」

この決定によって、軍事委員会は志願兵（dāvṭalab）を募り、訓練を施す一方、資金調達の為に州アンジョマンと協力して募金（e'āne）を実施し、二二万から三五万トマーンに及ぶ多額の現金が集められた。[2]因みに、この募金額を二〇万トマーンと低額に想定しても、低下しつつあったギーラーンからの徴税額、一八八八／九年の三四万五千トマーン、一九一一年の約二七万五千トマーン[3]のほぼ六〇～七〇％に相当し、いかに広範な住民が間接的であるにせよ立憲制回復の為のモジャーヘディーンの行動を支持していたかを物語っている。他方、これらの行動と並行して、一九〇九年二月下旬頃から小部隊の派遣が開始され、三月中旬迄にはラシュト＝テヘラン幹線道路のマンジール迄の三地点に要塞（sangar）が築かれ、軍事委員会は通行証明書を発行し、検問体制が敷かれ、[4]郵便物も検閲された。[5] Yūz Bāshī Chāī において進軍部隊は政府軍との最初の戦闘に勝利を収めるが、即刻マンジールに取って返し、同地でラシュトの軍事委員会からの代表団の参加を得て、「我々の今後の任務は何か。防御（modāfe'）しなければならないのか、それとも攻撃（tahājom）の道を選択すべきなのか。もし攻撃しなければならないなら、行動はどうあるべきか。」という議題で会議が開催されたという。アリー・モハンマド・タルビヤット及びこの段階で最高指揮権を有していたと考えられるモエゾッ・ソルターンはカズヴィーンの住民蜂起を期待し、彼らに援助を与えようという意見であり、セパフダールに従ってラシュトに到来し進軍部隊の一指揮官となっていたディーヴ・サーラール Mīrzā 'Alī Khān Dīv Sālār 及びエプレムはカズヴィーンへの進攻を唱えたが、モエゾッ・ソルターンが最終的に後者の主張を採用した為に、カズヴィーン進攻が決定的となった。[6]このことが事実とするなら、ギーラーン地方の動脈とも言うべきラシュト＝テヘラン道のマンジールの地点迄を制圧した時点においても、進軍部隊の指揮官レヴェルで戦略上の意思が必ずしも一致しておらず、特に蜂起、進軍の実権を握っていたモエゾッ・ソルターンにすら、既成事実、つまりラシュトを中心とするギーラーンの自治的状態を背景に地域的防衛に専心しようとする

姿勢が窺えるのである。これを以て、一九二〇年六月に成立する「ギーラーン共和国」にみられる地方的分離、独立傾向の萌芽的意識形態と看做すにはやや無理があろうが、少なくとも確認できることは、テヘラン進軍という行動が当初からの既定路線であったのではなく、予防的行動の延長線上にあったのであり、この段階でも未だ流動的要素を多分に孕んでいたのであった。

その意味において、テヘラン進軍への橋頭堡たり得たのはカズヴィーンの制圧（A.H. 一三二七年 Rabī' oth-Thānī 月一四日／一九〇九年五月五日）であった。[7] 約二か月にわたる進軍部隊のカズヴィーン駐留は、バフティヤーリー部族軍のエスファハーン占領と共に、国内外の政治動向に少なからぬ影響を与えると同時に、部隊の戦略上の手直しを図る絶好の機会でもあった。政治動向への影響という点での代表例として、モハンマド・アリー・シャーの立憲制回復への態度変化と立憲派内部での意見対立が挙げられよう。シャーは英露両国の外交的圧力もあり、A.H. 一三二七年 Rabī' oth-Thānī 月一四日付の勅令（dastkhatt）[8] で「立憲制の諸原則」（osūl-e mashrūtiyyat）の回復を約束していた。とはいえ、同勅令の文中では「親愛なる祖国の必要性、時代の要請、明快なる聖法（shar）とイスラーム教との調整による難事の解決と諸法の制定」等、極めて抽象的な表現が多かったが、カズヴィーン制圧直後の Rabī' oth-Thānī 月一八日／五月九日付の勅令[9] で、シャーは「一片の欠落（dharre-ye kasr o noqṣān）もない同じ憲法（qānūn-e asāsi）に基づく議会開設」に言及し、一九〇六年一二月三〇日発布の憲法復活の意図を示した。このようなシャーの態度軟化を更に確定的なものにする為に、カズヴィーン占領の数日後、ラシュトからカズヴィーンに到来し総指揮権を得たセパフダールは五月一七日に、「五一条から成る憲法と一〇七条から成る同法補則の完全復活」を明記した勅令を要求した。[10] Rabī' oth-Thānī 月二七日／五月一八日付の勅令[11] 中で「憲法の一五八条に基づく立憲制」と明示されたことによって、この要求は文面上は一応の承認を受けることになる。形式的であるにせよ立憲制回復が同意されるという事態の進展に伴って、立憲派内部でも見解が二分される状況が生み出された。[12] タキーザーデの見解はその典型であると考えられるので、ここで簡略に紹介しておきたい。A.H. 一三二

七年 Jomādā'l-Avval 月／一九〇九年六月一一日付のタブリーズからカズヴィーンに宛てた電報文[13]中において、彼はモジャーヘディーンがカズヴィーンからテヘランに進軍するかどうかという問題を「政治的基本問題」(mas'ale-ye asāsī-ye siyāsī) であるとし、それを巡って「国内外の微妙さを考慮し、状況の悪さには目をつぶって政府と和解しなければならない」とする見解と「立憲制を与えるとか云々の総てのこのような政府の方法は策略である」為に「イランの解放は国民(mellat) がテヘランを攻撃し、腐敗の循環を断ち、専制の実体を根絶することにのみある」とする見解とを併記し、自己の立場は前者であるとする。そして、英露両国の存在を常に意識せざるを得なかった当時の立憲運動の複雑性も反映して、その論拠を「他国の干渉」の危険性に求めるのである。カズヴィーンで結成された軍事委員会によって六月下旬に同地に招喚されていたキャリーム・ハーンは、タキーザーデのかかる見解に対し、あからさまな批判は避けつつも、タキーザーデ宛の電報[14]の中で、「貴兄が勇敢なるモジャーヘディーンの代表に対して性急さ ('ajale o tondravi) を非難されたことは、国外では事の真実が誤られたとしても、我々は疑念を払拭することができません」と述べ、タキーザーデが論拠とした「他国の干渉」に対しては、「ラシュトとカズヴィーンには約五千名の武装駐留軍がいますが、極めて治安は良く、一般民衆は平安と安心の中にいます。常に外国人は方策と口実を得ようと躍起になりましたが、未だに幸いにも目的に達しておりません。」と「治安の良好さ」を強調する。更に、ディーヴ・サーラールはタキーザーデの「この見解がセパフダールの表裏 (bāṭeni o ẓāheri) の意図に合致するとしても、軍指揮官はこのようなことに対し不満であり、一致してテヘラン占領とモハンマド・アリー・シャーの廃位を望んでいた。[15]」と明言し、既に指揮官内でテヘラン進軍が確定的になっていたことを示唆しているのである。

七月四日の英露両国の外交代表による説得工作[16]、七月八日のロシア軍のアンザリー上陸にも拘らず、進軍が再開され、コムから来るバフティヤーリー部族軍と共同しつつ、Karaj, Bādāmak での戦闘を経て、七月一三日未明、テヘランに進攻し、四日間の市街戦の末、シャーはロシア公使館に避難し、立憲制が回復されることとなった。シャーの譲歩、立憲派

内部での対立、英露の圧力等を排して、テヘラン進攻が実現された要因として、シャーの矢継ぎ早の立憲制回復の勅令発布にも拘らず、それが実行段階に移されないばかりか、タブリーズにはロシア軍が駐留し、テヘラン防衛の為に政府軍が陸続と集結されていたこと[17]、ナジャフ等からの精神的支援があったこと[18]、エスファハーンを占領下においたバフティヤーリー部族軍がコムに進撃したこと等[19]が挙げられよう。

次に進軍部隊の実態について検討する必要があろう。先に触れたように、カズヴィーン駐留が戦略的な面でも重要な意義をもったことは、進軍への参加人員の数的増加にも特徴的に表われている。カズヴィーン制圧迄の進軍部隊は僅か七〇～一〇〇名から成るいわば「ゲリラ部隊」に等しかったのに対し[20]、カズヴィーン占領時には一五〇～二五〇名[21]、占領後及びテヘラン進攻時には少なくとも八〇〇名、最大限に見積って約二〇〇〇名から成る大部隊[22]へと激増した。ディーヴ・サーラールの部隊もその例外ではなかったようである。

「ラシュトを出発したとき、私は僅か二〇名の騎兵（savār）しか所持しておらず、カズヴィーン迄、私の（部隊）の数は同じ二〇名であった。たとえ途中で騎兵の方から自発的に私の部隊に入りたいと望まれても私は受け付けなかった。カズヴィーンにおいてモエゾッ・ソルターンや他の立憲派（āzādī-khāh）指揮官からの強い要望で一〇〇名を私は受け入れた。[23]」

ラシュトに作られた軍事委員会と同様に、進軍部隊もまた民族別・出身地別に編成されていた。マレクザーデによると、時期は不明であるが進軍部隊は六隊に分かれ、そのうちの一隊がギーラーンのモジャーヘディーンによって構成されており、他の部隊はマーザンダラーンやアゼルバイジャン出身者、アルメニア人等によって構成されていたという[24]。また、ギーラーンから参加したモジャーヘディーンも定住性の強い都市や平野部からは少数で、むしろターレシュやデイラマーンの山岳地帯の部族やハルハールからギーラーンに季節労働者として来ていた人々が多かったと言われる[25]。従って、全体としてみるなら進軍部隊はギーラーンまたはラシュト住民の均一な武装部隊とは言い難く、多様な民族・地方出身者による

混成部隊と考えた方が妥当であろう。

一方、蜂起後にザカフカズから参集した支援部隊（その中にはイラン人移住者・亡命者も含まれる）も蜂起前にサッタール委員会に派遣された少数の政治活動の経験を豊富にもつグループとは若干、性格を異にしていたようである。マレクザーデの表現を借りるなら、前者は「普通」（sāde o ma'mūlī）の人々であったのに対し、後者は「老練」（kār-āzmūde）な者たちであった。[26] ラビノも、州アンジョマンが「カフカズのモジャーヘド」たちに武器を捨て、故郷に帰還するように説得したとき、「彼らは『自分たちは今までに体験したことのないような略奪品の約束によってギーラーンへ来るように勧められた』と言って帰還を拒否したこと」を伝えている[27]（一九〇九年五月）。この記述には多少の悪意が込められているかもしれないが、彼らの到来の目的が必ずしも革命の支援という大義にのみあったのではなかったことを物語っている。加えて、政治的背景については判然としないものの、エプレムとグルジア人を率いていたヴァリコフとが対立していた事実も史料上から判明することから、[28] ザカフカズからの支援部隊とて決して一枚岩でなかったことが窺い知れるのである。

最後に、カズヴィーン占領以降、テヘラン進軍総指揮官となり、第二次立憲制期には軍務大臣、首相を歴任したセパフダールについて論及しておきたい。セパフダール（一八四七～一九二六）はマーザンダラーンのトノカーボン一帯の最も有力な一族 Khel'atbari 家の出身であった。彼は一二歳で公務に入って以来、主に軍人としてイラン各地を転戦した。[29] 彼が比較的、住民の福利の為に尽力したことは、[30] 彼の最初のギーラーン知事在任（一八九九～一九〇三）中に、彼の知事解任の報に接したイギリス副領事A・F・チャーチルが「Nasrus Saltaneh (sic) は良い知事であり、私見では彼のラシュトへの留任が良策であろう。もし彼がラシュトを去るなら、彼の出立は後悔の念で振り返られよう。何故なら、彼は人々を抑圧しなかったし、寛大である。」[31]（一九〇〇年一二月）と評していることからも明らかである。ところが一方、セパフダールはイランでも随一の大土地所有者であり、[32] かつ五〇年に及ぶ宮廷との関係から、立憲制の出現には快い感情を抱いていなかったようである。[33] ただ、タブリーズ蜂起鎮圧の指揮官への任命に対しては余り乗り気でなかったことが彼の手記から

も窺える。

「シャーに拝謁し、そしてその翌日、アゼルバイジャン平定を命ぜられる。神は何をもたらせようとされるのか。（この）遠征が如何なる運命を持っているのか私には分からない。この件について仕方なく引き受ける。[34]」

かくして、彼はタブリーズへ赴いたが、包囲軍の指揮官となっていたエイノッ・ドウレ 'Eyn od-Doule への遺恨と作戦上の不満から、一九〇八年一一月に自分の息子たちの争いを収めるという名目で、生地トノカーボンに帰還してしまった。[35] 蜂起を計画していたサッタール委員会がセパフダールと交渉を持ったことは既に述べた。セパフダールは蜂起前に出発し、蜂起の一両日後にラシュトに迎えられ、州アンジョマンによって知事の権限を委託された。しかしながら、彼は殆ど実権を握っておらず、実施されていた募金の状況や金額すら知らされていなかった。[36] 一説によると、サッタール委員会は彼がトノカーボンから率いてきた部隊を彼に無断でカズヴィーンへ出発させ、彼を巧妙に武装解除させてしまったのだという。[37] カズヴィーン占領後は総指揮官となったものの、数多くの史書が一致して指摘する如く、彼は実際の統率力をもっていなかったばかりか、再三テヘラン進攻を中止しようとさえした。例えば、エプレムは「セパフダールは我々の絶対的権威をもった代表でない[38]」と述べ、ディーヴ・サーラールはセパフダールが「あなた方の軍隊がカズヴィーンを出発するなら、（ロシア）帝国軍があなた方を追撃するであろう。」と脅迫した[39]として、両者共、彼のロシア寄りの態度を批判している。

では、何故、このような人物が進軍部隊の名目的であったにせよ、総指揮官に任命されたのであろうか。彼の立憲革命への主体的参加の動機については議論の分かれる所であり一元的には確定しかねるが、サッタール委員会の側からの彼の存在価値は極めて高かったように思われる。彼はギーラーン知事を過去に二度も務め、しかも比較的、好印象を残していた為に、サッタール委員会の力量では到底為し得ない広範な住民の支持を促進する上で、また雑多な分子を内包していた進軍部隊の統一性を保持する上でも重要な役割を果たしたと考えられるのである。[40] 更に、彼の参加が立憲派の「天秤の皿」

(kafīe-ye tarāzū) を重くしたと譬えられ、[41] またセパフダール自身も自らの名が世界の大新聞に掲載されたことで自信を深めたと言われるように、[42] 単なる「地方的反乱」が一躍クローズ・アップされ、シャーと英露両国（特にロシア）にとっても侮り難い存在となったに相違ないからである。とりわけ、シャーにとっては、特にカズヴィーン占領以降顕著になりつつあったこの地方的枠組みを越えた、実態はともあれ「立憲制回復」を旗印にした統一的傾向—それは進軍部隊内であれ、バフティヤーリーとの共同行動であれ—こそが最も畏怖する所であった。というのも、際立った軍隊・官僚組織をもたなかったカージャール朝シャー専制支配は地域・宗派・言語等の社会各分野における間断なき諸グループ間闘争の微妙な均衡の上に立脚してきたとも指摘されるからである。[43] そのことは、選択肢が幾つもあったにも拘らず何故シャーがかくも急いでロシア公使館に庇護を求めたのか、と自問したケルマーニーの引き出した回答の一つに如実に示されている。

「刻々とコム、カーシャーン、エスファハーン、ケルマンシャー、シーラーズ、カズヴィーン、ラシュト、更にアゼルバイジャンからセパフダールの許に援助が届けられよう。今日政府軍が一万で、最大二万に達しようとも、国民軍が例え今日一万に到らなくとも、翌日に倍、その翌日に倍と、一〇日も経ずして一〇万に達しよう、と（シャー）は考えていた。[44]」

① Yeprem, *AT*, ṣ. 27–28. エプレムは「敵に対する最上の防御形態は占領した塹壕に隠れて敵の攻撃を待機することではなく、敵に攻撃を仕掛けることである」と主張したが、「危険な冒険主義」と批判を受けた為に個人個人を説得して回ったとも言われる（Rā'in, *YKhS*, ṣ. 99–100）。

② Rabino, *MG*, ṣ. 77; FO. 248/970, No. 228. ファフラーイーは六万トマーンが三回に分けて集められたと述べ（Fakhrā'i, *GJM*, ṣ. 131）、イヴァノフは自発的募金分だけで一九〇五—六トマーンという金額を挙げている（Иванов, стр. 375）。

③ 一八八八／九年は G. N. Curzon, *Persia and the Persian Question*, II, London, 1892, repr. 1966, p. 420、一九一一年は Rabino, "PCP," p. 64 に拠る。

④ Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 314; Иванов, стр. 356. 一九〇九年三月にここを通過したあるイギリス外交官は軍事委員会発行のパスを携帯していなかった為に四度止められて尋問を受けたという（V. Bérard, *Révolutions de la Perse*, Paris, 1910, pp. 115–116, Blue Book からの引用）。

⑤ Rā'in, *YKhS*, ṣ. 116–117.

⑥ Div Sālār, *YT*, ṣ. 65–66.

⑦ 詳細については以下を参照。Kasravī, *THSA*, ṣ. 22–27; Malekzā-

de, j. 5, ṣ. 272–276; Fakhrāʾī, *GJM*, ṣ. 146–149; Yeprem, *AT*, ṣ. 32–34; Div Sālār, *YT*, ṣ. 69–80.

⑧ 勅令文テクスト、Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 400–401.

⑨ 勅令文テクスト、Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 402–403.

⑩ Browne, *PR*, p. 302. この他に、外国軍隊の撤退、シャーの非正規軍の武装解除、宮廷からの反動派の追放を要求した。

⑪ 勅令文テクスト、Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 416–417.

⑫ キャスラヴィーはシャーの譲歩と英露の仲介によって、立憲派内が動揺（do-delī）しただけでなく、二派（do-gorūhī）に分裂したとし、セパフダールも含めた「妥協派」の本質をカージャール宮廷体制護持による自己保身と看做す一方、タキーザーデ等の言動を革命の最終的勝利がモジャーヘディーンの掌中に帰すことを危惧した為だと論難する（Kasravī, *THSA*, ṣ. 28–30）。

⑬ Afshār, *OTM*, ṣ. 36–40. 以下、引用は同所。

⑭ 『*Nasīm-e Shemāl*』紙（第四四号、Jomādaʾth-Thānī 月一〇日／六月二九日付）上に掲載された（Afshār, *OTM*, ṣ. 41–43. 以下、引用同所）。

⑮ Div Sālār, *YT*, ṣ. 79.

⑯ イギリス公使館付陸軍武官ストークス Major Stokes とロシア公使館付通訳官ベラノフスキー Барановский が共同でセパフダールと会見し、席上、セパフダールは(1)彼とサルダーレ・アスアド Sardār-e Asʿad（バフティヤーリー部族軍最高指揮官）が以下の諸点を議論する為に一五〇名の部隊に随伴されてテヘランに入ることを許可されるべし、(2)隣接列強のイラン領土からの撤退、(3)国民議会開設まで内閣の地方アンジョマンによる選出、(4)信用のおけない、または裏切り者と看做される人物の追放、(5)非正規軍の武装解除、(6)軍隊の軍務大臣による完全かつ直接的統制、(7)電信大臣の解職、(8)地方知事の地方アンジョマンによる承認、の八項目をシャーに伝達するよう要請し、二日間の休戦を認めた（Browne, *PR*, pp. 309–310; Lambton, "Persian Political Societies," pp. 84–85; Иванов, стр. 385–386; Khelʿatbari, *YSA*, ṣ. 28）。

⑰ 例えば、エプレムは手記の中で次のように述べる。

「過去何度かと同様に今度もシャーは我々を欺こうと考えていた。というのは、一方で我々の代表と議論しておきながら、他方で自分の軍を Karaj 峡谷に集結させ、日に日にその数を増加させていたからだ。この状況をみて我々も自軍を以前にもまして強化し、今後シャーの約束には欺かれまいと決意した。」（Yeprem, *AT*, ṣ. 35）。他方、キャスラヴィーは、シャーが立憲派の要求の大部分を実行せず、宮廷を守ろうとしていたこと、アゼルバイジャンやホラーサーンでのロシア軍の悪業がシャーの要請で為されたことが進軍の原因だとする（Kasravī, *THSA*, ṣ. 33–34）。

⑱ 議会開設を求めたラシュト住民六百名連名の電報の中でもナジャフからの教令（fatvā）を自ら実践していることが宣せられ、セパフダール自身も同様に考えていた（Fakhrāʾī, *GJM*, ṣ. 137–138, 159）。国外のシーア派聖地からの立憲運動支援の重要性は周知の通りであるが、特にこの時期に関しては、Cf. A. Hairi, "Why did the Ulamā participate in the Persian Constitutional Revolution of 1905–1909?," *Die Welt des Islams*, XVII, 1–4 (1976/7), pp. 138–144.

⑲ ディーヴ・サーラールはバフティヤーリー部族軍の進軍が如何に重要であったかを次の如く証言する。

「サルダーレ・アスアドとバフティヤーリーによるモジャーヘディーン援助の為のエスファハーンからコムへの出発はセパフダールに関するモジャーヘディーン指導者の悩みを解消させた。総ての者は再び団結し、カズヴィーンからテヘランへ向かうことで一致した。」（Div

Sālār, *YT*, ṣ. 81)。

⑳ Yeprem, *AT*, ṣ. 29 では七〇名以上、Dīv Sālār, *YT*, ṣ. 63 では「イラン人、トルコ人、アルメニア人、グルジア人から成る約一〇〇名のモジャーヘド」とある。

㉑ 一五〇名は各隊からの騎兵選抜部隊であったというから、勿論、これ以上の人員がいたことは想像に難くない (Dīv Sālār, *YT*, ṣ. 70)。二五〇名は Browne, *PR*, p. 300 と拠る。

㉒ 八〇〇名は Иванов, стр. 384、約二〇〇〇名は Browne, *PR*, p. 437; Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 276-278 と拠る。

㉓ Dīv Sālār, *YT*, ṣ. 78-79.

㉔ Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 172-173.

㉕ FO. 248/970, No. 229.

㉖ Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 141-142.

㉗ FO. 248/970, No. 230.

㉘ 両者の対立はラシュト蜂起前からの主導権争いに起因し (Rā'in, *YKIS*, ṣ. 84-85)、カズヴィーン制圧後のエプレムのロシア領事との単独接触や進軍指揮官内の無秩序な行動に反発したヴァリコフが戦線から離脱し、麾下のグルジア人部隊を率いてバクーに帰還するという事態に発展したという (Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 151-152)。

㉙ 今まで単にセパフダールと呼んできたが、彼の laqab の変遷は以下の通り。

Moḥammad Valī Khān→Sardār-e Akram→Naṣr os-Salṭane (トルコマン族平定のアスタラーバード遠征後) →Sardār-e Mo'azzam (第一回ギーラーン知事在任中) →Sepahdār-e A'ẓam (ギーラーン・マーザンダラーン連隊指揮権獲得後) →Sepahsālār-e A'ẓam (第二次立憲制期以降)

更に詳細な彼のバイオグラフィについては、*YSA* の前に付された同書の編者による略伝 (以下 *YSA*, *sharḥ-e mokhtaṣar* と呼ぶ) を参照。

㉚ ラシュト市内のサブズ・メイダーン庭園建設、ギーラーン横断幹線道路建設、教育の奨励等 (Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 32)。特に、森林・沼地の密集するギーラーン地方においては、道路建設は極めて緊急の事業であり、セパフダールの努力は住民から高い賞賛を受けた (A. F. Churchill, "Report on the Trade of the Consular District of Resht for the Year 1900," U. K. FO., *Diplomatic and Consular Reports*, Annual Series 2648, 1901, p. 6)。

㉛ FO. 248/724, No. 174.

㉜ 土地の他にも数多くの利権 (emtiyāz)—例えば、塩・石油・税関請負・電報局管理・道路建設—を獲得していた (*YSA*, *sharḥ-e mokhtaṣar*, ṣ. 18)。

㉝ Khel'atbarī, *YSA*, ṣ. 12; *YSA*, *sharḥ-e mokhtaṣar*, ṣ. 20.

㉞ Khel'atbarī, *YSA*, ṣ. 19.

㉟ FO. 248/940, No. 163.

㊱ Khel'atbarī, *YSA*, ṣ. 24-25.

㊲ Tadayyon, *NG*, ṣ. 301.

㊳ Yeprem, *AT*, ṣ. 36. また、Browne, *PR*, pp. 437-438 によればセパフダールは名目上の指導者 (matars: かかし) として利用されたのだという。

㊴ Dīv Sālār, *YT*, ṣ. 81.

㊵ Fakhrā'ī, *GJM*, ṣ. 121 によればロシアの武力干渉の可能性と全員が一個人に従う必要性があったことから、セパフダールに「革命の旗持」(parchamdār-e enqelāb) が任されたという。

㊶ Malekzāde, *TEMI*, j. 5, ṣ. 154.

㊷ Tadayyon, *NG*, ṣ. 249.

結びにかえて

以上、ラシュト蜂起、テヘラン進軍を中心にして、それを主体的に担ったアンジョマン、モジャーヘディーンの分析を試みたが、史料的制約もあり不明な点も多々あるものの、少なくともその一端は明らかになったと考える。まず、それらの諸点を「はじめに」で提示した課題との関連で再整理しておきたい。

ギーラーンの「公的」なアンジョマンは蜂起前と後では、その性格及び人的構成の両側面で基本的に相異なっていた。蜂起前のアンジョマンの立憲制擁護の拠点として、また蜂起が生み出される前提としての役割は否定しえないが、農民との関係では地主の利害を代表し、人的な面からみても立憲制への対応は一致したものではなかった。また、知事権力への対抗軸を創出し、行政への全般的関与を行なった点では、テヘランで国民議会がシャーに対峙したのと同様に、旧来の知事専横体制に楔を打ち込むことに成功したと言える。しかしながら、総体としてみるなら、蜂起前のアンジョマンは地方行政の補完的役割の域を出ないものであったと考えられる。それに対して、蜂起後の州アンジョマンは自治的組織としての全容をほぼ完備し、テヘラン進軍の後方基地としての役割を担ったのである。

「社会民主主義者」としてのモジャーヘディーンはギーラーンではラシュトとアンザリーに組織が存在し、ある時期からそれぞれサッタール委員会、バルク委員会と称された。ラシュトの「社会民主主義」グループはアンザリーのそれに比して政治的に穏健な立場、つまりイランやギーラーンの実情に妥協的な、いわば土着性の色濃い性格を有していた。この背景には「社会民主主義者」とて一般住民の立憲制理解、即ちラビノが「町や村の人々は立憲制の意味を正しく知っていない。多くの場合、自分でこの言葉を理解している。」[1]と指摘するように、「立憲制」が言葉の厳密な意味で理解されてい

㊸ E. Abrahamian, "Oriental Despotism: The Case of Qajar Iran," *International Journal of Middle East Studies*, V (1974), pp. 3-31.

㊹ Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 503.

たのではなく、一般にイスラーム的価値観の中に混在したものとして意識されていた現実を無視しえなかった事情があったのである。ラシュト蜂起はこのサッタール委員会が主導的に周到な準備を行ない、計画を立案し、ザカフカズからの支援部隊がそれに人的物的素材を提供したというのが実態であろう。そして、テヘラン進軍はこの蜂起の延長線上にあったものであり、当初から企図されたものではなかった。それを決定的にしたのがカズヴィーンの制圧であり、これがシャーの譲歩と立憲派内の相克を惹起したが、結局、テヘラン進攻が実行に移され、国民的勝利（fath-e melli）とも呼ばれる立憲制の回復が現実となったのである。そして、それを容易ならしめたのは、何よりもセパフダールを前面に出した統一性の保持にあったと推考されるのである。

かくして、第二次立憲制期が開始され、第二次国民議会開設（一九〇九年一一月）迄は、テヘラン進軍の指揮官や立憲派指導者によって結成された最高評議会（majles-e 'ali）が選出した臨時執行委員会（hey'at-e modire-ye movaqqati）が内閣を監視し、事実上の政府権力を代行した。同委員会中には立憲制回復の功労者としてモエゾッ・ソルターン、アミードッ・ソルターン、アリー・モハンマド・タルビヤット等のテヘラン進軍部隊の指揮官及びバフティヤーリー部族軍指揮官も含まれた。[2] しかしながら、立憲制新政府は幾つかの困難に直面しなければならなかった。その一つは、一旦、立憲制再建という大目標が成就されると、セパフダールと進軍指揮官の間にみられたような対立が表面化し、第二次国民議会での相対立する二大政党―「デモクラート」と「エッテダール」―の出現という形で噴出したことである。[3] 他方では、旧体制から引き継いだ財政破綻の克服及び中央政府の権力強化と治安維持も至上の課題となった。特に、アルダビールでの反立憲派残党ラヒーム・ハーン Rahīm Khān の反乱の掃討にはテヘランに進軍したモジャーヘディーンの軍事力がそのまま利用された。ところが、治安の強化を目指す新政府にとって、テヘランにおける彼らの駐留が脅威になったとき、彼らの武装解除が強制執行（一九一〇年八月）されたのであった。以上のように、ラシュト蜂起、進軍は第二次立憲制期の政治過程にも少なからぬ影響を及ぼしたのである。だが、立憲制新政府が財政再建を中心とした改革計画を実施し始めた矢先に、

一九一一年末のロシアによる直接的軍事干渉とイギリスの黙許がこれらを頓挫させ、立憲革命を潰滅に追込んだのであった。

尚、ギーラーンの地方史的展開という視点からみるなら、ラシュト蜂起は第一次大戦中の「ジャンギャリー」運動並びにボリシェヴィキ軍の軍事力を背景にして成立した「ギーラーン共和国」の前史的役割を果たしたとも言える。例えば、「ジャンギャリー」運動の指導者クーチェク・ハーンは立憲運動に身を投じ、テヘラン進軍にも参加したし、ホセイン・キャスマーイーは「ジャンギャリー」の機関紙『*Jangal*』の編集者でもあった。更に、モジャーヘディーンの参加や農民運動の組織等、共通点も多く、両者の比較検討による一層の解明が待たれよう。

① Rabino, *MG*, ṣ. 11.

② Kermānī, *TBI*, j. 5, ṣ. 494-495 ; Malekzāde, *TEMI*, j. 6, ṣ. 92.

③ テヘラン制圧から第二次立憲制の確立に至る過程を分析したものとしては以下が示唆的である。

R. A. McDaniel, *The Shuster Mission and the Persian Constitutional Revolution*, Minneapolis, 1974, pp. 88-115 ; Malek osh-Shoʻarāʾ Bahār, *Tārīḫ-e Moḫtaṣar-e Aḥzāb-e Siyāsī, Enqerāẓ-e Qājāriyye*, Tehrān, S. H. 1323, ṣ. 5-12.

（京都大学大学院生・　　）

Tombs of Warrior States Period in Haojiaping 郝家坪, Qingchuan County 青川県, Sichuan Province 四川省

by

Kazuyoshi Mase

In *Wen wu* 『文物』, no. 1, 1982 was published a report of a group of the tombs, dating to Warrior States Period, excavated in Haojiaping, Qingchuan County, Sichuan Province. By examining this report, we can find some points which correct the popular interpretation of the buried, the date of the burial and the excavated *mudu* 木牘 of the land law in Qin 秦 Dynasty. This report is, we think, a rare source for studying the historical realities of the making of Qin Dynasty in the latest years of warrior States Period. The buried consist chiefly of the influential persons of old Chu 楚, who were removed there after Ying 郢, capital of Chu, was occupied by Qin, and the rest are the people of Qin, Han 韓, Wei 魏, Zhao 趙, and the natives. Therefore, the date of the burial is after B. C. 278, year of the fall of Ying. And land law, which has so far been considered connected with the dry field farming in the basin of Wei-he 渭河, should be considered having been revised and adapted to the paddy field in Sichuan. Furthermore, we can guess that the new mixed group of the removed people had some autonomy based on the high traditional culture of Chu though it was organized under the system of the *qianmo* 阡陌.

The Uprising of Rasht in the Iranian Constitutional Revolution

by

Tskashi Kuroda

The armed uprising which broke out in Rasht, the main town of the province of Gīlān, in February, 1909, has high reputation in the history of the Iranian Constitutional Revolution, because it was one of the main

factors in putting an end to the period of "Lesser Tyrany" brought about by the coup d'état of Moḥammad 'Alī Shāh and reestablishing the constitutional régime. However, it has not been fully and totally investigated as yet, except for some mention of it as a part of the process of the Revolution.

So this article chiefly discusses the uprising of Rasht and the march to Tehrān following it, by analizing the *anjomans* which tended to have a character of the autonomous organizations of the inhabitants and the *mojāhedīn* which played the decisive part in the uprising and the march, both the *anjomans* and the *mojāhedīn* observed common to the uprising of Tabrīz. And I would try firstly to compare the "official" *anjomans* before and after the uprising, secondly to grasp the realities of the uprising by examination of the *mojāhedīn* as the "Social Democratic" groups and the support forces from Transcaucasus, and thirdly to consider the meanings of the march to Tehrān.

The Philosophic Opposition under the Early Principate

by

Takashi Minamikawa

In the latter half of the first century, some Roman emperors persecuted philosophers because of their opposition. Especially the Emperor Nero persecuted Thrasea Paetus and Vespasian put to death Helvidius Priscus. The historian Tacitus called Thrasea and Helvidius champions of liberty, so some scholars regard them as republicans. But others consider that their opposition originated not from republicanism but from their own philosophic creed, Stoicism.

In this paper we examine this opposition and persecution which scholars call the Philosophic Opposition. Our re-examination of historical sources shows us that their aim of opposition against emperors wasn't the overthrow of the Principate and that the opposition didn't necessarily originate from the Stoicism. We may infer that it was caused by a sort of conservatism originated from the rise of the new elite of the Roman Empire.